

---

# 魔法少女リリカルなのは ある鴉の兄弟の話

イザナギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ある鴉の兄弟の話

### 【Nコード】

N0190Y

### 【作者名】

イザナギ

### 【あらすじ】

ある管理外世界で、出会いは突然訪れた。

『存在しない存在』が物語に係わったとき、物語は静かに動きはじめ……。

これは『八咫鳥<sup>ヤタガラス</sup>』と呼ばれた、二人の兄弟の話。

この小説は、作者自体があまり原作を見てないので、独自の解釈やストーリーの矛盾などがあるかもしれません。

あと、アニメの内容を確認しながら執筆するので、非常に亀更新になる可能性大です。

至らない点などがありましたら、容赦なく突っ込んでください。感想などもお待ちします。

## prologue

人生とはどうして、なかなか思い通りにはならないもので

人との出会いも、なかなか不思議なもの

ある偶然がその人の人生を定め、

人と人との出会いが、いつか語られる『物語』ものがたりの始まりとなり、

そして『物語』が語られるのは……

……『物語』ではなく、その『物語』が終わった時。

人に未来は見通せない。

いつ、誰の話が『物語』として人々の間に語り継がれるのか。

それはまさに、神のみぞ知り得るのかもしれない。

しかし『神さえも知らぬ存在』がその世界に現れた時

その世界はどのような『物語』ものがたりを語り始めるのだろう

世界が語り始める『物語』  
おとぎ話なし

紡がれてゆくのは、誰かの人生  
ものがたり

魔法少女リリカルなのは ある鴉の兄弟の話

これから紡がれる『物語』おとぎばなし

どんな話になるのかは、神のみぞ知る



## prologue (後書き)

どうも、こんにちわ、作者のイザナギです。

書いちゃったよ、リリなの……他の連載どーすんだ……orz  
まあ投げ出さないように頑張ります……

あらすじやキーワードに書いたとおり、原作の方を確認して書いていきますので、かなりの鈍足更新になるかと思えます。

皆様のお口に合うものが作れるか……それだけが心配です。

次から本編のはず……『介入物』っぽいですが、原作に準拠していきます。

途中で恋愛描写とかあったりするかもしれないので、『は俺の嫁!』という方はお気を付けください……。

今後とも、よろしく願います。  
ではっ!

# That Is A Wonder Encounter 1

この世界で『東の果ての国』、『極東の国』とも呼ばれ、かつては時の大国に『日出国』と喧嘩を売った国、日本。

彼<sup>が</sup>の国において特徴的なのは、四季がはっきりしており、なおかつそのことに何かしらの感情を持つ感受性らしい。

今は四月。

桜の花が咲き乱れ、多くの場合『門出の季節』として入学式などの行事が執り行われる時期だ。

この時期に感じるのは……新しい一年への期待だろうか。よくわからん。

そんな季節の移ろいの真つただなか只中に、その都市も含まれていた。

ここは海鳴市。

海辺に面し、都市化はしているものの、多くに自然を残す平穏な街。

田舎というには物が建ちすぎ、都会というにはいささか物足りない部分もあるような、そんな都市。

治安が悪いわけでもなく、かといって大々的に宣伝しているような観光地を持つわけでもない、一般的な都市といえるだろう。

『平凡な、しかし平和な街』

そんな看板レットがよく似合うこの街に、闇闇が降り立つ。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

人の目につかないような森の中。

夕焼けにしては濃すぎる赤が空を覆い、木々の葉は不気味にざわめく。

そんな不穏な雰囲気の中に、少年がいた。

探検隊の隊員が着るような上着に、ももをむき出すほど短い短パン。腰には道具を入れているのだろうか、ウエストポーチのようなものを付け、マントのような外套がითოを羽織っている。

日本では少し変わった服装だ。

そんな、日本に不釣り合いな姿の少年が、不気味な森の中にいた。

息を乱し、腕を庇い、その手に血を滲ませながら。

「はっ……はっ……はっ……っ!!!」

少年は何かの気配に気づき、目線、そして体を、自身の左手側の茂みへと向ける。

彼が振り向くが早いか、目線の先の茂みから影が頭を出した。

眼は赤く、後ろに触手のようなものまで見える。それは明らかに、この地球で見かけるような生物の姿ではない。

そして血走ったかのごとく真紅に輝く眼は、まっすぐと少年へと向けられていた。

「……っ！」

その姿を確認すると、少年は腰元から小さな宝玉のような物を取り出す。

ほんとに小さい。せいぜい飴玉くらいだろうか。

とても武器になるような類の代物には見えないそれを、少年は目の前に突き出した。

不思議な光景が起こりはじめる。

飴玉のような宝玉が、輝きだした。

次には、その輝きだした宝玉を中心に、真円とこの国の言葉ではない文字の羅列が、うすい緑の光によって描き出される。

意味を持つのだろうその光の筋は、正方形も加わってさらに複雑な形へと組み上げられていく。

そう、まるで 魔法陣のように。

すべてが組みあがると、その魔法陣は宝玉に近づきながら円の径を縮めていく。

だが自分に対して不利なものだろうと悟ったらしい『影』が、茂みから飛び上がった。少年の用意が整う前に攻撃するつもりらしい。

実際、少年の準備も完了していなかった様子で、顔中に玉のような汗を浮かべながら歯を食いしばる。

少年にとっての幸いは、この影 怪物とも呼べる異形の者の足が、それほど速くなかったことだろうか。

向かってくる『怪物』に対して、魔法陣を展開しながら少年は言葉を発する。

まるで、向かってくる怪物に聞かせるためのように。

「<sup>たえ</sup>妙なる響き、光となれ！

赦されざる者を、封印の輪に！」

すべてを言わせまいと怪物が飛び上がるが、すでに遅かったようだ。

少年が、最後のフレーズを叫ぶ。

「ジュエルシード、封印っ！！」

少年の叫びとほぼ同時に怪物が魔法陣のど真ん中に突っ込んだ。

衝突の瞬間、怪物も少年も、眩しい光に包まれる。

周りの木々を照らし、小枝や木の葉を吹き揺らした激突は、怪物が跳ね返される、という形で決着がついた。

跳ね返され、地面に打ち据えられた怪物は、体の一部なのだろう肉塊のようなものをボロボロと落しながら、弱々しく必死になりながら這って逃げ出す。

その姿はまさに瀕死の状態。あとは蹴りの一発でも入れれば倒せそうな状態だったが

「……にがし……ちゃった……おいかけ……なく……ちゃ……」

少年には、今の状態では蹴りどころか立つことすらままならない様子。

手で体を支え、なんとか前に進もうとするが、言葉を発することに体から力が抜けていき、最後の台詞を言い切ると同時に崩れ落ちた。

先ほどまでの戦いで疲労が蓄積していたのか、魔法陣による『封印』という行為がとどめとなったのだろうか。

少年は倒れ伏すと、ピクリとも動けなくなってしまったようだ。

「（クロウはまだ……帰ってこれないはず……僕が……どうにかしなきゃ……でも……）」

少年の思いに反して、体は言うことを聞いてくれないらしい。先ほどから指の一本も動かせない状態に、彼は陥っていた。

「（可能性は……どこまでも低いけど……）」

このままでは自身が衰弱しきつて、その『クロウ』という人物が彼を見つける前に彼が天国へ連れて往かれることになるだろう。

それだけはどうしても避けたかった少年は、一縷の望みにかけて最後の『悪あがき』をやってみることにした。

《……誰か……僕の声聴いて……》



口も開かない疲労の中で、彼は『心』で話し始める。  
誰か 特別な存在である『誰か』の『心』に届くように。

《……力を貸して……》

必死に……ただ必死にその『誰か』に気づいてもらうために、少年は『心』に語り続ける。

《……魔法の……力を……》

しかし最後の力を振り絞ったのだろうか。生命活動は停止していないが、『心』の声さえ発せなくなった。

だが、またしても不思議なことが起った。少年の体が光に包まれていく。

ほんの一瞬だけ少年を覆った光は急激に小さくなり、光に包まれた少年の体が消えた。

今、その場所には一匹の不思議な小動物が、淡い緑の光をまとって横たわっているだけだ。その光もすぐに、うすれていった。

あの少年が持っていた宝玉が、小動物のすぐそばに落ちる。

色こそ不気味な空と同じような紅色だったが、この空と違って輝きを持っていた。

「遅くなってしまったか……………?」

街中の電柱の上にたたずむ影。少年のようにマントを羽織<sup>まき</sup>ってはいるが、少年の物は濃い茶色だったものに対し、その影が纏<sup>まと</sup>うのは、まさに影のごとき漆黒のマント。

フードを目深にかぶり、マントの前もあわせているので、顔も内に着ている服も分からない。

「ユーノは……………大丈夫だろうか?」

不安そうな声を隠さず漏らした影は、顔をビルの立ち並ぶ街やその傍で共存している森へ向けた。

「……兄さんも来るし、早く合流しないと」

そういつて影は、闇に染まり始めた街並に向けて、跳んだ。

マントがはためくその様は、闇に向けて羽ばたいた鴉カラスのように見えた。

題名の英語は、アニメの直訳を疑問形じゃなくしたものです。ウザいですね。合ってるかどうか分かりません；

違っていたり、『こつちの方が良いんじゃない？』みたいなのがあれば、遠慮なくご報告ください。

ちなみにまだ第一話です。アニメに準拠しながら、ところどころにオリジナルの話を挿入する予定です。できるかはわかりません(ワイ

ところどころに書いてある通り、作者はアニメをほぼ見たことが無いので、それを見ながらになります。

ゆえに鈍足更新です。ご了承ください。

今回は……なのはちゃんが魔法使うとこまで、かな？ そこまでで短く感じたら、次の話を含んだりするかもしれません。

ではっ！

## That Is A Wonder Encounter 2

とある一軒家の二階、その一室のベッドの上で、携帯のアラームが鳴る。

おそらく目覚まし時計の代わりに使っていたのだろうか、しばらくすると、もぞもぞと布団をかき分けながら、小さな手が桃色の携帯をつかんだ。

ベッドから落したりと手間は少しかかったがアラームを止めることには成功した様子で、そのまま携帯は布団の中へ連行される。

ゆっくりとした動作で布団から体を起こしたのは、少女だった。ところどころ寝癖が見え、まだ眠かったのだろう、目は寝ぼけ眼になっている。

「ふわあぁ〜……なんか、変な夢見ちゃった……」

未だに眠たげな顔をしながら、少女はそれだけ呟く。

この少女の名前は、『高町なのは』。この海鳴市に住み、私立小学校『私立聖祥大学付属小学校』に通う、小学三年生。

家族構成は以下の通り。

父：高町士郎・喫茶店『喫茶翠屋』のマスター。 37歳

母：高町桃子・喫茶店『喫茶翠屋』の菓子職人。パティシエ 33歳

長男：高町恭也・大学一年生、剣術家。 19歳

長女：高町美由紀・私立風芽丘学園二年生。 17歳

次女：高町なのは・私立聖祥大学付属小学校三年生。 9歳

……うん、ツッコミどころなんてないヨ。ホントダヨ。

若干殺気を感じるが気のせいだ。そうだ。

家族の仲は良好。喧嘩もほとんど無いらしい。

というか両親がバカップル過ぎて近々なのはに弟か妹が出来そう  
なくらいのアツアツぶりなので、少なくとも離婚とかの危機は皆無  
だろっ。

朝食時の今も、士郎が桃子の料理の出来栄えを誉め、そのまま二  
人だけの空間に突入した。

こうなると一定時間イチヤイチャしないと二人とも帰ってこない  
ので、三兄弟のうち一人はなのはそんなバカップル二人を観察し、他二  
人の年上組は朝食をとることに専念するわけだが

「美由紀、リボンが曲がってる」

「え、ホント？」

「ほら、貸してみる」

こっちはこっちで、ほぼ無意識の内にイチャついていた。

五人家族のうち二つのバカップルが生まれたということは、一人なのはが余るということだ。

「（愛されてる自覚はあるんだけど……）」

こんな光景に苦笑いを浮かべながら、正直自分一人だけ浮いてる感覚がぬぐいきれないでいた少女なのはだった。

そして、そんな光景が似合ってしまうほど、高町一家は美男美女揃いだった。

「（……羨ましいなあ）」

私立、というだけあって、小学校とはいってもなかなか豪華だ。

なんせ、専用のスクールバスを持っている。

作者の通った公立高校なんて路線バスを登校の時間帯だけ貸し切ったみたいなものだった。

僻みはこれくらいにしておいて。

なのはが元気な挨拶とともに乗り込むと、バス最後尾の座席で彼女を呼ぶ声か。

声のするほうへ視線を向ければ、紫色の髪の少女と金に近い小麦色の髪の少女がなのはを呼んで手を振っていた。

「すずかちゃん！アリサちゃん！」

親しく呼ぶのだから、友人なのだろう。

軽く朝の挨拶を交わすと、小麦色の髪の少女が一人分の席を開け、なのはを座らせる。

紫色の髪の少女が『月村すずか』、小麦色の髪の少女が『アリサ・バニングス』というらしい。

二人ともなのはの親友で、小学一年生の時からの付き合いらしく、三年間同じクラスで過ごしているという。

さらに三年生に進級した今年から同じ塾へと通うなど、さらに付き合いを深めている。

三人の少女の楽しげなおしゃべりを乗せながら、スクールバスは走っていた。



「……………将来かあ……………」

午前中の授業が終わって、現在は昼休み。

きれいな海を一望できる絶景スポットである屋上で、先ほどの授業中、先生が口に使っていた『将来』という言葉を呟きながら、なのは母・桃子特製のタコさんウインナーを頬張った。

ちなみにこの『タコさんウインナー』、さすがに口は無かったものの、ゴマで目を作り、頭には海苔で作ってあるらしい鉢巻までつけた力作。結構かわいい。俺も食べたいゲフンゲフン

それをなのは一口で頬張った。おそらく量産されすぎて見慣れてしまったのだろうか、躊躇がなかったな。

口の中のタコさんを咀嚼して飲み込んだのは、先ほど口にした『将来』について、親友二人の話を聞いてみることにした。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

二人とも、漠然と、という言葉が付きそうな口調だったが、しっかりとした返答を返した。

アリサは両親が会社経営をしているらしく、その跡を継ぐことを第一に考えてるらしい。

すずかの場合は、機械が好きだから工学系の専門職に就きたい、とのこと。

正直、9歳小学三年生が口にするような内容に思えない気がしないでもないが、この二人は漠然としながらも、すでに将来のビジョンを持っているということになる。

……若干早すぎる気もするが。

「……そっかあ……二人ともすごいよねえ……」

「でも、なのはは『喫茶翠屋』の二代目じゃないの？」

三人の中で一人だけ確固としたビジョンを持たないことに落ち込んだのだろうか、力のない声でなのははが二人を誉めれば、アリサはなのはの両親が経営している『喫茶翠屋』の二代目がなのはではないのかと問いかける。

なのはは、それも将来のビジョンの一つだと答えるが、『やりたいうことがまだ他にある気がするけど、それが何かははっきりとしない』と付け足した。

特技もとりえも特にない、と話した瞬間、左から「バカチン！」という怒声とともに、スライスされたレモンが飛んできて、なのはの左頬にくっつく。

投げたのはアリサで、レモンは弁当のから揚げの付け合せに入れてあったものだ。

「自分からそういうこと言うんじゃないの!」

「そうだよ!　なのはちゃんにしかできないこと、きつとあるよ!」

なのはの友人二人が、落ち込み気味だったなのはを励ます。

「だいたいあんた、理数の成績、この私よりいいじゃないの!」

アリサは先ほどのなのはの発言を掘り返し、『これで特技じゃないとはどの口が言うのだ』とばかりに、なのはの口を引っ張り始めた。

それに対してなのはは引っ張られて涙目になりながらも、文系苦手、体育も苦手と反論するも、アリサはそれを聞き入れる気配無し。結局すずかに止められ、周りの生徒の注目を浴びていたことに気づいて、アリサもようやくと手を放す。なのはは「痛いよ、アリサちゃん!」と抗議していたが、アリサが手を放し、痛みが引くと、自分を心配してくれた二人に感謝を述べる。

アリサは真っ赤になって「は、励ましたんじゃないだからね?!?」なんて叫んでいたとかいないとか。

そんな様子を、周りの生徒は生暖かい目で優しく見守っていた。

「(……………自分にできること……………自分にしかできないこと、かあ……………)」

空が朱色に染まり、海の近くで海鳥が鳴く。

塾に行くために公園を通る。

途中、子犬にキャンキャン吠えられて業を煮やしたアリサが「Be quiet（黙りなさい）！」と怒鳴ったので、アリサという少女は短気なのだろう。

公園でアリサが見つけたという塾への近道。

コンクリートなどで舗装はしていないが、たしかに道はあった。

夕暮れということと森の中ということもあり、初夏に近いこの季節でもこの道はかなり薄暗い。

何か出てきても、正直おかしくない雰囲気もあった。

「（あれ、ここ……どこかで……）」

何とも言えない既視感を、なのはは感じる。

しかしここに来るのは初めてだ。

それなのに最近見た気がする。

ふと、思い出した。

赤い空、ざわめく木々。

その中に立つ少年。

ぶつかり、輝く何かと少年。

「（ここ、昨夜夢ゆめで見た場所……）」

『誰か』と『何か』が戦って、『何か』が逃げて、『誰か』が倒れた場所。

思わず足が止まった。

友人二人に呼ばれて『大丈夫』と返し、自分にも『まさかね』と言い聞かせて、彼女は友人たちとともに前に進む。

《

たすけて………》

「っ!？」

しばらく抜け道を歩いていた時のことだった。

突然、頭の中で声が響いた。また足が止まってしまふ。

なのはの異変に気づき、足を止める友人二人。

「なのは?」「どうしたの?」

「……今、何か聞こえなかった？」

誰かの声のような、と付け足すのはだが、二人には聞こえなかったらしい。

しかし幻聴とも思えず、なのはあたりを見回して、声の発信源を探してみる。

《 助けてっ！ 》

「 っ！ ！」

もう一度、今度は切羽詰まった声が聞こえた。

これで特定したらしい。なのはがその声の発信源と思しき場所へ駆け出す。

「 たぶんっ、こっちからっ 」

運動は得意ではないからか、すでに息が切れがちになっているものの、一生懸命に走る。

そして、自分の感覚だけを頼りにしばらく走っていると、道の先に何か見つけた。

小さなイタチのような生き物が、丸くなって横たわっている。

体中に怪我を負っているように見えるが、どうにか生きているらしい。耳が動くと誰かいるのか察知したらしく、どうにか顔をあげた。

かなり痛々しく弱っている姿に、なのはは優しく抱き上げた。

後ろから二人が追いつくと、なのはに抱かれた生き物を目の当たりにし、あわてはじめた。

怪我をしているから病院へ、動物だから獣医さんに、近くに獣医さんってあったっけ？

少々落ち着け、獣医さんは人だ、それをいうなら動物病院だ。

それはともかく近くの動物病院を探すことにしたが、さすがに記憶を当てにするのは少々心もとないようで、すずかの家に電話して確かめることに。

小さなイタチもどきは、その様を不安げに眺めていたが、体力の限界なのか、気絶するように再度丸くなった。

ここは、榎原動物病院。

すずかの家で調べてもらったら、ここが一番近かったらしい。

どうにか診療時間内に駆け込めたらしく、適切な処置を受け、イタチのような生き物の命に別状はないようだ。

処置をしたのは榎原病院の院長でもある、榎原 愛先生。高町家の美男美女のも劣らない美人さんだ。

彼女の話では怪我はそれほど深くないが衰弱が激しいので、長い間一人ぼっちだったのだらうとのこと。

なのはたちがすっかりお礼を述べると、やさしい母親のような笑顔を浮かべた。

アリスの見立てでは、このイタチもどきはフェレットではないかというところらしい。もちろん、日本には野生のフェレットはいるわけないので、どこかのペットじゃないかという推論にたどり着く。しかし榎原先生の見立てでは『フェレット』とは微妙に違っている。それに首につけている赤い宝玉も気になるとのこと。

宝玉を手に取りろうとした瞬間、そのフェレットもどきが首を持ち上げた。

どうにか起き上がるほど元気が戻ったのかとその場の全員が安堵する中、状況がつかめないのかあたりをきよろきよろと見回すフェレットもどき。

この後、誰かを探すようにフェレットもどきが周りの人たちの顔を見比べ、なのはをしばらく見つめた後、なのはが差し出した人差し指を一なめして、また倒れた。

しばらく安静が必要との判断で翌日まで病院のほうで預かることになり、なのはたちは翌日も様子を見に来ることにして塾へと向かう。

塾でしっかりと勉強して……と言いたところだが、今回はそれどころではなく、今日見つけたフェレットもどきについての相談を



筆談でやり取りしていた。

なのはが簡単にフェレットもどきを書いて『この子どうしようかと問題提議。』

アリサの家は庭にも部屋にも犬がいるので厳しいだろう、と。

すずかの家にも猫がいるらしく、フェレットを入れるのは危険だろうとのこと。

また、なのはの家も、喫茶店を経営してることもあってペットは原則禁止。

さあ、フェレットもどきの明日はどっちだ！

……なんて雑談してるうちに、なのはが当てられたものの、計算を即座に解いて事なきを得た。

結局、なのはが帰宅して家族会議してみるということでこの話は落着。

帰宅後、なのはは食事の時に思い切って事情を話し、家で預かれないかと直談判することに。

結果、『籠に入れて、なのはがきちんと世話をする』という条件で許可が下りた。頼みごとや我が俣といったことをほとんど言わな  
いできた末っ子の初めての我が俣、ということで大目に見たのかも  
しれない。

なににせよ、フェレットもどきはなのは宅で預かることになり、  
友人二人にもそのことを報告するとともに、翌日そのフェレットも  
どきを迎えに行く約束をして、一日が終わった。

……………終わったはずだった。

T h a t I s A W o n d e r E n c o u n t e r 2 (後書き)

魔法使うとこまで行かなかった……orz

だって間が悪かったんだもん！(え

長くなり過ぎて、ここまです一回切ることに。

この調子でやってたらいつまでかかることやら……

草木も眠る静寂に包まれた住宅街を、一人の少女が駆ける。

高町なのは。

なぜこんな夜中に走っているのかといえば、またあの『声』が聞こえたからだ。それも、一刻の猶予もない雰囲気を匂わせる必死な『声』が。

ゆえにいても立ってもいられず、親や兄弟の目を盗んでこうして声に導かれるまま、声の主を助けに走っていた。

走ることしばらく。

ようやく辿り着いた先は『榎原動物病院』。あの『フェレットもどき』を預けた場所。

ここに何があるのか、と思った矢先だった。

鼓膜に突き刺さるような耳鳴りが聞こえ始める。

すぐさま耳を押さえるものの、それはなのはが『声』を聴いた時、そしてそれ以前にも、昨夜見た夢の中で聞こえていた高音だった。

耳鳴りは響き続け、なのはが未だに耳から手を離せずにいると、周囲の風景、というか色彩が変わり始める。

星明りや街灯の光で青に近い黒だった夜の色が、だんだんと赤く染められていく。まるで昨夜の夢で見た、あの少年が戦っていた森のように。

辺り一帯……もしかしたら海鳴市全体が赤く染まったのかもかもしれない。

周囲が不気味な赤に染められると、不意に耳鳴りがやんだ。

しかしそれだけでは終わらないらしい。

なのはが手を放すとともに聞こえてきたのは、聞いたこともない『何か』の唸り声だった。

病院の中に何かいる

そう確信して中に入ろうとなのはが敷地内に足を踏み入れた瞬間、彼女の視界に何か映る。

「あれはっ!」

白い包帯を巻いた、小さい影。見たことがある。なにせ、夕暮れ

時にその命を救った張本人なのだから。

脱走したのだろうか。しかしただ病院内から脱走したわけではないようだ。

小さい影の後ろに、不気味な影が迫っていた。

不気味な影は小さい影を追いかけていたが、どうやら鬼ごっこというわけでもないらしい。

どちらかと言えば小さい影が『襲われている』という表現がぴったりだろう。

などと言ってる間に『小さい影』フェレットもどきが避難した一本の木に、不気味な影が体当たりをした。

木がへし折られてフェレットもどきが宙に浮く。

その時フェレットもどきの目に映ったのは

こちらに両手を伸ばした少女の姿。

どうにか折られた木を足場にジャンプ。少女、なのはの胸に飛び込む形で窮地を脱した。

「わっ！」

急に跳んできたフェレットもどきをつまぐ受け止めたが、尻餅をついてしまった。

すぐさまフェレットもどきの様子を確認、異常が見られないのを確認して、なのはは不気味な影を見やる。

「な、なにになにつ、いったい何っ!?!」

日常では当然ありえない光景にしばし混乱するなのはに、追い打ちがかかる。

「き、来てくれたの……?」

胸に抱いたフェレットもどきがしゃべったのだ。

「しゃ、しゃべったっ!?!」

しゃべった。聞き間違いでもなんでもなく、ちゃんと口を動かして、人の言葉を話した。

さらに混乱して半ばフリーズしそうになったなのはだが、

「(そ、そんな場合じゃないよね)」

とりあえず自分を落ち着かせることにして、それは成功した。

が、落ち着いたところで状況は好転するはずもなく、木に突っ込んだままだった影が再び動き出す。

その双眸そくまが、少女を捉えた。

「と、とにかく逃げなきゃっ!」

少女は撤退を選択した。

先ほどから混乱しっぱなしの少女が説明を求める。しかし腕の中の話せる小動物は話を聞いているのかいないのか、『力を貸してほしい』と協力を要請しだした。

とりあえず簡単な情報くらい提供しろよ、とは思わないではないが、フェレットもどきにとっては一刻を争う話なのだろう。

少女がフェレットもどきの言葉に含められていた『資質』という部分に反応すると、小動物はようやく、簡単にだが身の上を話し始めた。

「僕は……僕たちは、ある探し物のためにここではない別の世界から来ました。でも、『僕たち』の力だけじゃ思いを遂げられないかもしれない……」

『彼ら』では力不足だと分かった。ゆえに、迷惑であるとはわかってきたがこの世界の『資質を持つ』人々に力を貸してもらいたい、と。

そしてその『資質』を持つのが、誰あるうこの少女、『高町なのは』なのだという。



謝礼は、必ずするとのこと。その代わりとして、このフェレットもどきの力を借りて手助けをしてほしいと。

「僕の力を……………」魔法』の力を！」

「……………魔法……………？」

うまく状況が呑み込めなかったらしく、なのはの頭上にははてなマークが浮いている。

それはそうだろう。いきなり喋りだしたかと思えば魔法の力で手助けしてほしいと頼むフェレットもどき。人が人なら『これは夢だ』で済ませそうな内容の、まさに夢物語のような話だから。

しかしさつきも言ったが、事態は好転してはいない。

少女が状況を理解するよりも早く、『状況』が彼女を巻き込んだ。

頭上から唸り声。

見上げれば先ほどの影が急降下で襲い掛かってくる。

土煙が盛大に上がるが、落下点にはすでに少女はいなかった。

呆然と見上げていた少女の体を、黒い影が抱えてすぐそばの電柱の陰へ押し込んだのだ。

「無事か？」

電柱になのは達を押し込んだ影は、そのまま彼女たちを守るために盾になっただけらしい。

なのは達が顔を上げれば、その影の正体は闇色のマントだった。マントの前がはだけて、内側に着ている白い服も見えたが、『服』というよりか『鎧』のような代物に見える。

未だ呆然とする少女だが、抱えるフェレットもどきは特に動揺もせずに、話しかける。やはり敵が目の前なので幾分か焦っていたが。

「助かったよ！ お兄さんと連絡が取れたんだね？」

「別件で少し遅れるらしい。先に来た……………その子は？」

声の質からして、まだ声変わり前の少年のようだ。よく見れば身長もなのはよりは大きい程度のように見える。

少年とフェレットもどきが二言三言かわすと、少年がなのはにについての説明を求めた。

「こつちでの協力者だよ。……………まだ交渉中だけど……………」

「……………いたんだな、ホントに」

「あ、あのっ！」

「ん？」「ん？」

大まかな説明と意見を交換するフェレットもどきと少年の間に、なのはが割り込んだ。いい加減に放っておかれるのも困るらしい。

「あ、あなたは、誰ですか？」

「……………ああ、俺は……………チツ！」

少年が何か言おうとするときに、また唸り声が。どうやら影の怪

物が復活したらしい。

実は先ほどの急降下で標的を外し、顔面から突っ込んだので昏倒していたのだ。……バカだろ……。

しかしそれほど状況が良いわけじゃなく、怪物は襲い掛かる気マンマンでこちらを睨みつける。

「こいつの友達だ………注意を引き付ける。その間に！」

「わかった！」

少年がフェレットに言うが早いか、電柱のそばから離れ、怪物の目前に。

「だ、だめだよっ！ あぶないよっ！！！」

「今のところはバリアジャケットを展開してるから大丈夫！ だから、僕の話聞いて！」

「で、でもっ」

「大丈夫ですからっ！ 僕たちの手伝いをしてくれれば、必ずお礼はしますからっ！」

「お礼とか、そういう場合じゃないでしょ！」

とにかく話を進めたがる小動物に、とりあえず現状における的確なツツコミをする少女。

と、いきなり爆竹を数十発鳴らしたような音が響く。

音のするほうを見てみれば、少年が何かを怪物に向けて構えていた。

少年の構えるそれは、分かりやすく例えればこの地球上に存在する『銃器』、それも両手で保持するような『アサルト・ライフル』とも呼ばれる部類と同じような外観をしていた。

最初はライフルでいうストックに肩を当て、狙いを定めていたようだが、おもむろに腰だめに持ちかえると

「……『レイン・バレット』！」

何事かを発し、そのまま引き金を引く。

ボンツ、という音がするとともに、無数の光弾が怪物に襲い掛かったが、怪物は怯む程度で致命傷とまではいかないらしい。

そのあと何度か少年は拡散する光弾を撃ち続けるが、さすがに怪物もあまりダメージがないと悟ったらしく、危険を覚悟で少年に突っ込んだ。

動き自体はそんなに早くないので、少年は転がるように左へ回避。怪物が向きを変える前に、ライフルのマガジンに相当する部分を取り外し、別のものに取り換えて再度セットする。

「カートリッジ、リロード」

呟くと同時にその銃器に操作を加えると、薬莖のようなものが一つ排出された。

少年は最初のようにまた肩にストックを当てる。

「『ラピッド・バースト』！」

爆竹のごとき破裂音が連なる。今度は拡散せずに一直線にいくつもの光弾が怪物へ。

だが怪物も一撃の威力がそれほど大きくはないと分かったようで、銃弾を浴びながら少年に突っ込む。少年は回避。

明らかに決定打に欠け、長期戦の様相を呈している。

「ど、どうしよう……」

身を張って囷になっている少年を心配そうに見ながら、なのはは  
呟く。

すると、フェレットもどきが自分の首に下げていた宝玉を差し出  
す。

「これを！ このままじゃ、僕たちにはあの怪物をどうにもできな  
いんです……！」

なのはが宝玉を手にとると、それは柔らかく光り、ほんのり暖か  
さを持っていた。

誰かに暖められたのではなく、内側からその熱を発しているかの  
ように。

フェレットもどきが自分の後に続くように促す。

なのははその宝玉を握りしめると、フェレットもどきに言われた  
ように目を閉じて心を澄ませ、フェレットもどきの後に続いた。

『我、使命を受けし者なり』

握りしめた宝玉の輝きが、さらに増した。

『契約の下、その力を解き放て』

宝玉から、心音が聞こえた気がした。

『風は空に、星は天に』

あの耳鳴りが響き渡る。

『そして不屈の心は、この胸に』

何かが、閃く。

『この手に魔法を!』

なのはが、宝玉を掲げた。

『不屈の  
レイジング・ハート、セー  
ット! アー  
ップ!』

宝玉から、光が満ち溢れる。

その宝玉から、声がした。

「Stand By Ready・Set  
up!」

機械の合成音のような声だった。

天に向けて柱が建つ。  
桜色の、光の柱が。

あまりの眩しさと光景に、怪物も少年も戦闘を中断してその様子を眺めていた。

まさに『絶句』と表現できる顔をして、少年は眩く。

「なんつー……」  
「なんて魔力だ……」

フェレットもどきも驚いた様子でつぶやいた。  
すぐさまフェレットもどきはなのはの目前に立ち、いまだに状況をつかみ切れていない少女に話しかける。

「落ち着いてイメージして！ 君の魔法の力を制御する、『魔法の杖』の姿を！ そして、君の体を守る、強い衣服の姿を……！」

「そ、そんなつ……急に言われても……えーと……えーつと……」

そらそうだ、いきなり変な力に目覚めさせられて、そしたら『魔法の杖と防護服？をイメージしろ』と言われたのだから。

それでもちゃんと考えるあたり、高町なのはという少女は真面目だった。

どうにか、その『魔法の杖』が心に浮かび上がった。あとは防護服？だけだが、これは案外すんなりと決まった。

「と、とりあえず、これでっ……！」

とりあえずって、途中で変更とかできるのか分からないのに決定していいのか？という疑問が湧くが、今のところはじっくりと考えさせてくれる余裕もないので、仕方ない。

……いわゆる『変身シーン』は割愛させてもらう。理由は目のや





かなりの衝撃だったようで、少年が当たったところの塀はひび割れて陥没している。

邪魔はいなくなったとばかりに怪物はなのはを振り返る。

「くそっ！」

連続した破裂音。少年が必死に起き上がり、怪物の背後から光弾を叩き込むが、

「がっ！」

さらに触手の追撃を受けてうずくまってしまった。

そのまま攻撃の対象をなのはに切り替えたようで、じりじりとなのはを塀まで追い詰める。

「来ます！」

「っ！！！」

フェレットもどきの警告と同時に、怪物が飛び上がった。先ほどの不意打ちをもう一度、というわけなのだろうか。

怪物はそこら辺の民家より高く跳ねると、なのはに照準をロック。猛スピードで突っ込んできた。

「きゃっっ！」

おもわず、なのはは魔法の杖を盾に、と構えた。

すると、魔法の杖『レイジング・ハート』の赤い球体の部分に、文字が浮かび上がる。

「Protection」

文字の通りに機械音が喋ると、怪物となのはの間に透明な桜色のバリアが生成され、怪物を受け止めた。

10秒もないぶつかり合いの末、屈したのは怪物のほうだった。押し返されるエネルギーに負けたのか、体をバラバラにされながら吹き飛ばされる怪物。……弱すぎじゃね？

というほどバリアの反発力は弱いものではなかったらしく、あの怪物の体の塊が散弾のように飛び散り、コンクリートの塀や道路に突き刺さって穴ぼこにし、拳の果てには電柱もへし折れた。ちなみに、あの少年もなのはが使ったのと同じ魔法『Protection』で防御しており、怪我はない。

こんな現状を演出した少女、なのはは、というと、

「はあはあはあはあはあ………」

怪物がはじかれた直後、距離を取るために走っていた。決して変態の息遣いではないので、あしからず。

そして腕に抱いたフェレットもどきが何か言うが、小難しすぎて今の状況じゃ理解できないのでスルーさせてもらう。ちなみに少年はなのはのすぐ後について、怪物の方を警戒していた。

端的にまとめれば、『あれは悪い魔法のせいのできた怪物で、や

つつけるには『封印』するしかない』とのこと。

「よ、よくわかんないけど、どうすればいいの?」

「さっきみたいに、攻撃魔法や防御魔法などの「話が長い!」うっ……」

フェレットもどきの話をさえぎったのは、あの少年。

十字路に入り、電灯でようやくフードに隠れていた顔が見えた。

目つきが少々悪い以外はそれほど特徴的なパーツはない。まだなのは同世代と推測できるので、成長次第では判断できないが、顔のパーツは悪くなく、全体的に見れば整った顔立ちだといえる。

「こいつは物を説明すると回りくどくなるんだ……簡単に言っていないか?」

「う、うん……」

少年から睨みつけられて少々物怖じしながらも、なのはは頷いた。ちなみに、少年は睨み付けたわけではなくただ単に目つきが悪く誤解されやすいだけなので、あしからず。

「『封印』みたいな強力な魔法を使うには、呪文がいる」

「『呪文』……?」

「そう、呪文。」

「……心を澄ませる。お前の呪文が、心の中に浮かんでくるはずだ」

そう言われて、なのはは目を閉じた。

少年に言われたとおり、心を澄ませる。

唸り声。復活した怪物が、なのはに向けて一直線に向かってきた。

目を閉じているなのはの横で、少年が彼の『魔法の杖』なのだろう銃を怪物に向けて構える。

こちらに攻撃の姿勢を見せる怪物に対しながら、少年は横目でなのはを見やった。

「（まだ……なのか？）」

また怪物が飛び上がり、今度は触手で攻撃を仕掛けてくる。

「くっ！」

少年が迎撃しようと構えた瞬間開いた。

なのはの目が、

そして先ほどまでの混乱が嘘のように凜とした顔で、『レイジング・ハート』を構える。

攻撃や防御などの簡単な魔法は、心に願うだけで使えるという。そして今、なのはが防御を念じたことで、『自分の意志で』防御魔法『プロテクション』が発動した。

怪物の触手は当たった瞬間ボロボロになり、その光景を見て、怪物は目を見開く。

その様を見た少年が、小さくつぶやいた。

「……今度はこっちの番だ」

同時に、なのはが心の中に浮かんだ『呪文』を唱える。

「リリカル！ マジカル！」

”封印すべきは忌まわしき器、『ジュエル・シード』”！

フェレットもどきが、『封印すべき対象』をなのはに教える。

「『ジュエル・シード』、封印っ！」

[Sealing mode・Setup]

なのはの宣言とともに『レイジング・ハート』がセットアップを宣言。

若干宝玉の部分が伸び、その下からスロットが解放され、桜色の魔法の翼が生成される。

大出力モード、『シーリング・モード』。強力な魔法を使用する際に用いられるモードで、たいていの『魔法の杖』の高出力体系として用いられるらしい。

その『シーリング・モード』から桜色のリボンが伸び、怪物を雁字搦めにする。

苦しそくに呻く怪物の額に『XXI』という文字が浮かび上がる。ローマ数字で『21』を表す文字だ。

[Stand by Ready]

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアルNo.21！

封印！」

[Sealing log]

なのはと『レイジング・ハート』の音が響くと同時に、さらに桜色のリボンが増え、怪物を襲う。

雁字搦めの怪物の体を十数本のリボンが貫き、怪物の体は爆発…

……するかと思いきや、塵のように消えた。

後に残ったのは、青い不思議な輝きを放つ石。そして激戦を物語る、穴だらけのコンクリート塀と道路。

なのはが石の存在に気づいた。

「これが、『ジュエルシード』です」

フレットもどきが解説する。

「えと、この後は？」

「その『レイジング・ハート』で触れるんだ」

なのはの疑問に、少年が答えた。

言われたとおり『レイジング・ハート』をかざすと、石が浮かび上がり、『レイジング・ハート』の宝玉部分に吸い寄せられたかと思うと、その中に吸い込まれた。

「Receipt No. XXI」

『レイジング・ハート』の独特の電子音声が響いて、『ジュエルシード』を回収したことを知らせる。

それと同時に、なのはの変身も解除され、『レイジング・ハート』も最初に渡された宝玉の形態に戻った。

「あ、あれ、終わったの……？」

今まで無我夢中だったのだろうか、急に静かになった周りを見渡しながら、なのはは呟いた。

「はい、あなたのおかげで……」  
「……ありがとうな」

その眩きに、フェレットもどきと少年が返した。

「僕からも……ありがとう」

「ちょ、ちょっと、大丈夫っ!？」

「……怪我が完治する前に動き回った影響だな……」

「そ、そんな冷静に観察してる場合だっけ!？」

フェレットもどきがまた力尽きたのと同時に……

ウーーーーーウーーーーーファンファンファンファン

なにかのサイレンが聞こえてきた。  
その音に、人間二人が硬直する。

「も、もしかしたら、私……ここにいたら、たいへんアレなのは  
……っ?」

「『アレ』ってなんだよ……でも『やばい』ってのは、分かるぞ……  
……」

引きつり気味の顔で話すのはに、丁寧にツッコミを返す少年。  
共通してるのは、『ここに留まるのはマズイ』という直感。



「で、でも……」

「……俺たちの話がこの世界じゃ夢物語並に信憑性ないのはわかってる……だから……」

「だ、』だから『?」

少々間を開けて、はっきりと少年は告げた。

「逃げる!」

「ふえええええ!?!?!?」

いうが早い少年はなのはの手をつかみ、一目散に駆け出した。もちろんフェレットもどきを小脇に挟んで。

56

少々罪悪感がぬぐいきれない少女は、去り際に

「と、とりあえず! ごめんなさ〜い!〜!」

と言い残すことだけにしたが、ここに駆けつけるであろうおまわじ国家公務員さんたちに伝わったかどうかは謎である。

Incantation

：呪文、まじない

わざわざ英和辞典で調べてます。語彙が貧弱ですね。

さて、オリキャラが登場しましたが、名前が未だに出ていない……まあわかりやすい伏線張っておいたので分からない人はいないと思います。

題名のとおり、オリキャラ兄弟です。

キャラの設定とかは考えてありますが、二人とも出てくるまで公開しません。

他に登場させるオリキャラは今のところいませんが、シリーズに一人程度は追加してみたいなあ……（え

まあ今は一期を終わらせることに集中しますが。

慣れたらオリキャラを中心に書いていきたいなあ……。

読了、ご苦労様でした。ありがとうございました。

今回は一期二話の後編みたいなものですかね。本編一話につき二話程度の感覚で書いていきたいです。慣れたら一話でいけるかも？とにかく、今後とも精進していきますので、お付き合いいただける幸いです。

それではっ！

別に追いかけてられるわけでもないのに逃走した二人と一匹が逃げ込んだ先は、先ほど戦闘を行った場所の近くにある、自然が多く残る公園。

さすがに真夜中に公園で遊ぶような酔狂な輩は海鳴にはいないらしく、ここでなら人目につかずに話ができるだろう。

二人、なのはと少年のうち、なのはは息も絶え絶えといった様子でそばのベンチに座り込むが、少年の方は少々息が乱れた程度で、二回三回の深呼吸で呼吸を落ち着かせた。

なのはが運動が苦手だということもあるだろうが、それでも先ほどの現場からこの公園まではそれなりに距離がある。それをなのはのペースに合わせていたとはいえ走ってこの公園まで来て、その程度しか疲労していないというのは、この少年、かなり鍛えているのかもしれない。

「……………すみません……………」

なのはの呼吸がある程度落ち着いてきた場合を見計らったのか、

少女が抱えていたフェレットもどきが急に謝りだした。それに対してなのは、起こしてしまったことに対する謝罪を述べる。

「けが、痛くない？」

「怪我は平気です、もうほとんど治ってるから」

そういつてフェレットもどきが身を震わせると、それまで体にかかっていた包帯がほどけ、綺麗になった体をな的是に見せた。

「ほんとだあ、けがの跡がほとんど消えてる……すごい」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました。それに、その『すごい』ことは彼もできるんですよ？」

感心していたなのはに感謝を含めた言葉を送るとともに、今なお『治療』の真つ最中である『彼』に首を向ける。

釣られてその方向を見たなのは、少しだけ目を見張った。

池の前に備えられた柵に腰かけ、少年が右手を光らせて左の肘にかざしている。

淡い青色だったが、それは優しく暖かな光だった。

「けが、してたんだ………そっか、私たちのために身代りに……」  
「………ただのかすり傷だ。そいつほど重症じゃない……」

外見の年齢にそぐわない、かなりぶつきらぼうな言い方だったが、そのなかに少女を責める言葉はなく。

実際に軽傷のようで、赤い出血部分が見えるが、それも少年が光る手をしばらくかざすと、跡形もなく消えていた。

「すごい……」

「……常識だ」

「よくわかんないけど、そーなんだ……」

「いまいち理解していない、といった感じだったかなのは納得することに。」

そして、今度は彼女から提案をした。

「ねえ、自己紹介、していい？」

「あ、うん」

「……ああ」

意思疎通できる動物と、成り行きで出会った少年に、自分の事を紹介しようというのだ。おそらく、彼女なりに『友達になるう』という意思表示なのだろうか。

一人と一匹の同意を得た少女は、一つ咳払いをすると、さっそく自己紹介を始めた。

「わたし、高町なのは、小学校三年生。

家族とか仲良しの友達は、『なのは』って呼ぶよ！」

「……僕は、ユーノ・スクライア。『スクライア』は部族名だから、『ユーノ』が名前です」

「よろしくね、ユーノ君！ それと……」

期待のまなざしで、なのはは少年を見る。

しかし少年は目を合わせようとしない。まるで、あまり関わりたいくないかのよう。

しばらくそうすれば少女が諦めてくれるのを願っていたのだろうか、その目論見はあっさりと潰えた。

「……えと、名前を覚えてくれないと、なんて呼べば良いのか分からないよう……」

少女が困ったような顔で少年を見つめる。その目は若干、潤んでるようにも。

傍らにいるユーノも、『しょうがないんじゃない?』みたいな表情で少年を見やった。

ほぼ泣き落としのような状況の中、嫌そうな顔をしながら、しづと少年は口を開く。

「……クロウ・コーヴァス……好きなように呼べ……」  
「わかったよ、『クロ君』!」  
「っ!?!?」

思わず腰かけた柵からずり落ちてしまふ『クロ君』こと、クロウ・コーヴァス。

しかしそんなクロウの様子もどこ吹く風で、ニコニコと少女は『よろしくね、クロ君!』と笑いかけてきた。

無邪気なその笑顔に呆然としたクロウは、どこか脱力し、肩を落とす。

「……好きにしる」  
「うん!」

無邪気に笑う少女の姿を見ながら、ユーノと名乗ったフェレットもどきは俯いた。

それに少女が気付く。

「……どうしたの、ユーノ君？」  
「すみません……あなたを……」

落ち込んだ様子で話し始めるユーノを、なのはは抱え上げ、『あなた』ではなく『なのは』と呼ぶように促した。

ユーノは、若干訂正して続きを話す。その間も、浮かない顔だ。

「……なのはさんを……巻き込んでしまいました……」  
「俺たちがもう少しうまく対処していれば……お前の手を借りなくて済んだはずだった……」

ユーノの言葉に続くように、クロウも口を開く。その口調は厳しく、まるで自分を責めているかのように。

若干ジメジメした雰囲気を纏わせ始めた一人と一匹を見て、なのはは口を開いた。その顔にあるのは、笑顔。

「えと、たぶん、わたし平気！」

暗い雰囲気のある二人に向けられたのは、少女の太陽のような笑顔。そして、なのははおもむろにベンチから立ち上がる。

「あ、そーだ！ ユーノ君まだケガしてるんだし、こんなところじや落ち着かないよね。」

クロウもゆつくりしたところに居た方が良いと思うし……。

とりあえず、私の家に行きましょ？ 後の事はそれから、ってことだー！」

ねっ？ 太陽のような笑顔でそう同意を求められればその好意を無下にすることもできずに、なし崩しに彼女の家に向かうことが決

定した。

「……ユーノはまだマシだが、俺はどうする？」

「……あつ」

しかしあまり深く考えての発言ではなかったらしい。

屋敷のような立派な門構えの家がある。それが高町家だ。



ちなみに庭付きで池もあり、道場もついでる。      なんだこの高級住宅。

「い、いーい？ クロ君は最近できたお友達ってことで……」  
「……こんな時間に遊びに来る友達ってどうなんだよ」  
「あう……」

ここまでくる道中でも、なのはは『クロウの設定』について頭を悩ませていたが、クロウ本人はすでに達観しており、高町家に侵入する（しかも真正面から）のは常識的に今の時間帯では不可能だと悟っていた。

それでもどうしても少女は二人と一匹で話がしたいらしいが、うんうん悩んでいるうちに、ついに高町家の門前に辿り着く。

「ど、どーしよう……」  
「……どうにかする」

溜め息をつきながら、クロウは少女に家に入るように促した。  
引き戸を開けて、少女は抜き足差し足で玄関を目指し、少年はとくに不審な行動をするでもなく恐る恐る進むのはの後に続く。

が

「おかえり」

声変わりをした渋い男性の声に、少女の足が止まる。

「お、お兄ちゃん……」

腕に抱えるユーノを隠しながら声のする方を見ると、険しい表情を浮かべた青年　　なのはの兄、高町恭也が立っていた。

「こんな時間に、どこにお出かけた？ ……それに」

険しい表情で鋭くなっている眼光がさらに鋭くなり、なのはの傍らに立つ少年を見据える。

対する少年も睨み返した　　ように見えるが例の如

く目つきが鋭いだけなので、そう見えるだけである。

いや、若干睨み返してもいた。

その様子を見た恭也が、言葉を続ける。

「　　そいつは誰だ？　　こんな目つきの悪い友達は、なのはの友達にはいなかったと思うが」

「えっと……」

「……………目つきの悪いのは『どそのお兄様』も同じかと思いますけど……………」

ピキッ、と音がした気がする。発信源はおそらく恭也の頭部。

見事に血管が浮き上がっていた。マンガの如く十字状に。

「……………目だけじゃなく、口も悪いようだな……………」

「……………何もしてないのに睨みつけられたら、誰だって不快になります」

「」の……………」

まさに売り言葉に買い言葉。  
いくら恭也の態度が悪かったとはいえ、さすがにクロウも言葉に毒を滲ませすぎている。

「あらかわいい〜！」

恭也の堪忍袋が切れかけたまさにその時、なのはの背後から、呑気な声が聞こえた。

「お、お姉ちゃん？」

高町家の長女、美由希だった。

美由希はなのはが抱えるフェレット、ユーノを見て、にこやかになのはに話しかける。

「あら、なんか元気ないね。なのははこの子の事が心配になって、様子を見に行ったのね？」

「え、えーと、あの、その……」

美由希の言葉はなのはを擁護するような発言だったので、なのははとっさに反応できずに言葉を濁す。

それはそうだ。まさかこの動物（とすぐそばにいる少年）によって魔法が使えるようになった、なんて言っても子供の妄言としか受け取られない。

よって結局、目線ですぐそばの少年に助けを求めた。

（ど、どーしよう、クロ君）

（……とりあえず話を合わせろ）

クロウもアイコンタクトで返事をする。それは睨みつけるような感じになってはしまったが、とりあえず伝えたいことは伝わった様子。

「そ、そーなんだっ！ 怪我してたから、心配で……」

見るからにシュンと縮こまるのは。

本当に申し訳なさそうに小さくなる姿に、さすがに頭に血が上っていた恭也も矛を収めることにした。

「気持ちは分からんでもないが……だからといって内緒で、というのはいただけないな」

言葉遣いが独特だな、などとクロウはのんきに考えていたが、再び矛先が自分に向くとは思いもしなかっただろう。

「それに、この少年は誰なんだ。こんな友人がなのはにいたなんて聞いたことがないぞ」

ふたたびクロウを睨みつける恭也。

しかしさすがにクロウは今度のケンカ腰な挑発に乗ることはせず、冷静に切り返す。

「……自分の名前はクロウ、といいます。夜に散歩をしていたら、なのはちゃんと偶然会ったんです。

夜に出歩いてたわけを聞いたら、動物病院でこのフェレットが脱走していたそうで、それを保護したそうです。

それで、夜の道は危険だから、自分が家まで送ろうって言って、ここまでついて来たんです」

さつきまでの態度が嘘のように、やけに丁寧な言葉でクロウは嘘を吐いた。

まるで息のように吐かれた嘘はとっさに考えられたものとは思えなかったが、パツと見て矛盾は見られないため、真実を知らないものには彼の嘘は真実に聞こえる。

『魔法を使えるようになって、怪物と戦ってました』なんて言うて信じられるわけもないのだから。

「それは良いが……なぜ、なのはを下の名前で呼ぶんだ？」

「……友達ならそれくらいあたりまえでしょ？」

しかし彼の舌には少量の毒針が仕込まれているようだ。言葉の端々にわずかに毒が含まれている。

どうやらこのクロウという少年は、売り言葉には買い言葉で返さないと気が済まないらしい。面倒な奴だ。

またもや血管が切れそうになった恭也を止めたのは、末の妹だった。

「もー！ クロ君もそんな口の利きかたしないのっ！ お兄ちゃんも、クロ君をいじめないでよー！」

「……すまん」「」

クロウはともかく、9歳に怒られる恭也（19）。

なかなかシニールである。

「せつかくだから上がっていきなよ。なのはって男の子のお友達少ないから、歓迎するよ〜」

「……なぜ少ないのかは、何となく察しが付く気がする……」

ぐだぐだしていると、美由希からまさかのお誘いが。後半部分について恭也の方をジト目で見ながらクロウは小声でつぶやいたが、これはなかなか千載一遇のチャンスだ。

当初は無理だと思っていた高町家訪問が合法的(?)に可能になり、なのはの両親にも顔合わせができる可能性も出てきた。まさに一石二鳥(?)の提案。

(……けど、三人だけで話すのは難しそうだ……)

クロウは冷静にそう判断した。

その大部分を占める理由が、時間帯。すでに真夜中、子供が出歩けば補導されるような、なのは自身も就寝準備を終わらせていたような時間だ。そんな時間にいきなりお宅訪問とは、いくらなんでも非常識すぎる。

入れるだけでも儲けもの。結局は『子供は寝る時間だ』といわれしてお暇することになるだろうと、クロウはふんでいた。

理由だけならこれだけでも十分だったが、クロウ個人的にはもう一つ懸念がある。

(……このシスコンが、俺と……なのはに会話をさせるかどうかも怪しいしな)

少々心の中で葛藤したが、結局クロウは心の中でも『なのは』と呼ぶことに決めた。そんなことで葛藤する……何というヘタレ。

ちなみにクロウの中ではすでに『恭也』シスコン』が成立していたりする。

そのシスコンに会話の機会を減らされては、万が一の際の行動に

支障をきたす恐れがあるだろう。

「（まあ……それはどうにかする方法はあるんだが……ここで考えていても仕方ないか）」

「……わかりました、お邪魔します」

「うん！ いらっしやい！」

「ゆっくりして行ってね」

「……………フン」

美由希に向かってクロウは頭を下げた。

高町兄妹は（約一名を除いて）歓迎の言葉で返す。

クロウの件が一段落すると、しばらくほったらかされた、なのは腕にいる動物へと話題が流れた。

「それにしても可愛いね、このフェレット。これ、クロウ君の家の子じゃないの？」

「……………うちは……鳥を飼ってましたから……………」

微妙に言葉に詰まりながら返すクロウだが、美由希はそれに気付いているのかいないのか「へ」と言いながら月明かりにユーノを照らしてよく眺める。

ふと思いついたのか、少々笑みを含んだ言葉でこういった。

「うちのお母さん、この子見たら悶絶しちゃうんじゃない？」

「それは否めんな」

「じゃはは……………」

恭也も苦笑いで言い返し、なのはも心当たりがあるのか苦笑を浮

かべるが、ただ一人

「……………そうですね……………」

クロウだけが……………いや、よく見ればフェレット、ユーノも微妙な顔をしていた。



Orz

二話で納めたかったのに……  
しかもいきなり週ペースになってるし……

アニメの方見てもらえれば分かりますが、アニメを丸写ししてます  
(蹴)

だって原作知らないも同然なんだもんっ！(涙)(殴)  
でも頑張ります……

……あ、来週はもう一つのも上げないと……  
それでは……



どことなく齒切れの悪い答えを返すユーノ。……そういえば少女はどこで着替えたんだ……？

「とりあえず、昨夜はおつかれさま！」

「そ、それはこちらこそ……」

昨夜の一連の出来事の中である意味ユーノが一番疲れたのは、なのは両親に引き合わされた時だろう。

なにせ女性というものは元来『可愛いもの』には目がない。

それはもちろん高町兄妹の母である桃子も例外ではなく、ユーノを『顔合わせ』として渡されたときに

「や〜んかわいい〜！！」

首根っこ掴んで頬ずりし、それに飽き足らず首根っこ掴んだままぶんぶん振り回した。おそらくユーノの脳みそは存分にシエイクされてしまったことだろうが、胃の中でシエイクされたものを吐き出さなかっただけマシだろう。

そのあと一家の家長である士郎に『お手』を求められたり、いまだに『イタチ』と憶えられてたり。そして『お手』に応えた後にさらに花子と士郎に撫でくり回されてフラフラになったところなのはの制止もあってようやく解放された。

その後は、若干空気になりつつあったクロウの紹介に入ったが

「ほほう……………まだなのはにくつつく悪い虫がいたとは……………」

先ほど恭也から向けられた視線を、今度は大の大人から向けられることに。

現役を退いたとはいえやはり武道家だったからなのか、その視線には殺気さえ籠っているように見える。

そんな目を向けられた本人は

……………この親にしてあの息子……………つか……………)

特に動じることもなく、だいぶ呆れていた。

それもそうだ、殺気自体はかなり強力なものだが、発せられる理由がただ単に娘の男友達（しかも同年代「小学生程度」が家にやってきて目の前にいると分かれば、その程度で殺気を発する相手はむしろ微笑ましくもある。

クロウは、とりあえず当たり障りなく両親や兄弟の質問に答えていったのだが

「……………なのはとどこで出会ったんだ？」

「……………散歩してたら落とし物があって、持ち主がなのはちゃんだったのでその時に知り合いました」

「なのはがそんなドジを踏むわけがないだろうっ！！」

「……………（親バカなのか……………バカ親なのか……………）」

「なんでなのはが呼び捨てなんだ？」

「……理由話しませんでしたか、『お兄さん』?」

「貴様に『お義兄さん』と呼ばれる筋合いはないっ!」

「……(勝手に都合の良い変換してんじゃねえよ……)(」

「なのとはどういづこ関係なのかしら?(目をキラキラさせつつ)

」

「……たまに会って話をする程度の友達ですよ、お母さん」

「あら、『お義母さん』なんて気が早いのね〜」

「……(この人はある意味ダメだ……)(」

「じゃあ私は『お義姉さん』って呼んでいいからね!」

「……遠慮します」 強烈な殺気を感じる

「え〜! なんでさー」

「……(女性陣は俺を殺したいのか?)」 桃子との会話からず  
っと殺気が増しているのを感じている

万事が万事、この調子だ。なのはも会話に加わったりするが、両親や兄弟の言葉の真意には気づいていない。

とにかく根掘り葉掘り聞かれるとボロが出る存在であるクロウは、会話の中心をユーノにそらす。

「……ところでこのフェレット、どうするんですか?」

クロウの問いにようやくフェレットについての相談を始める高町一家。クロウも『多少の知識はある』ということで参加した。

結局、相談の中で決まったのはユーノの食糧についてなどだが、それを決めるために（クロウがいたおかげで）グダグダな会議をする羽目になり、時計はもう日をまたぎ、なのはとユーノはなのはの自室で就寝し、クロウは高町家で一泊するはめに。

就寝の直前でようやくほんのわずかな時間を見つけて三者会議をした結果、なのはの希望により『普通に名前を呼んで、普通にお話する』ことが約束事として決まり、クロウは兄と父の前でも約束を守った際、命の危険を感じるほどの殺気を浴びせられたことは言うまでもない。

なのはが通学カバンに今日使う教材とノートなどをしまい、登校準備は完了した。

「じゃあ私、学校に行かないといけないから、帰ってきたらお話、聞かせてね？」

「あ、大丈夫」

ユーノがなのはの言葉に反応する。

「離れていても、話はできるよ」

「……ふえっ？」

なのははいまいち理解できていないようなので、ユーノは実例を見せることにした。

起き上がってなのはをじっと見つめると

《なのははもう、『魔法使い』なんだよ》

いつか使った『心の声』でなのはに話しかける。

なのはも『ユーノがなのはを呼んだ声』と同じものだとして理解して、ある程度納得した。

「これ、私を呼んだ時の……」

《そう。レイジングハートを身に付けたまま、『心』で僕に話しかけてみて》

言われるがまま、なのははレイジングハートを手に取り、胸のあたりに押し付けるようにして持つと、ユーノに話しかけてみる。

「えっと……」

《………どう？》

《そう、簡単でしょ？》

「ほ、ホントだあ！」

《あと、クロウにも話しかけてみて》

なのはの練習のためか、『心の声』でしゃべり続けるユーノは、クロウにも話しかけてみるようになるのはに促した。

《クロウ君、聞こえる？》

《………ん、なのは？ ユーノから習ったのか》

《うん！》

なのはから『心の声』が聞こえ、クロウからも応答が即座に来る。一応『心の声』が使えることを確認すると、ユーノはさらになのはに語りかけた。

《空いた時間にいろいろ話すよ。僕たちの事とか、魔法の事とか……》  
『ジュエル・シード』の事とか《

「あ、うん……」

《休み時間とか、一人になったり他人と会話しないような時に話しかけるように。大きいリアクションもあまりとらないこと。変人に見られるからな》

《わ、わかったっ》

なのはが学校へ出かけた後、クロウも高町家を辞し、その際玄関に塩をまかれたのをユーノは見た。主犯はもちろん高町家の男性陣だ。

その光景に若干引きながら、ユーノはクロウに話しかける。

《クロウって、もう『なのは』って呼ぶのに慣れてるね》

《……人間、腹くくったら空だって飛べる》

《え？》

《お前がヘタレなだけさ》

《……言っに事欠いて、それは無いでしょ》

冗談だよ、と返してくるクロウにため息が漏れるユーノ。顔の見



える位置にはもういないが、おそらく笑っているだろう。  
それよりも、とユーノは話し出す。

《しばらく僕の拠点はここになりそうだね。クロウの拠点はどんな  
ってるの?》

《それを得るのに時間がかかって遅れた。この都市の地理的な中心  
の場所に空き家があって、そこを間借りさせてもらってる》

まだ自分もクロウも成人どころかその半分ですらないのによく貸  
し出してくれたな、とユーノは思ってクロウに言ってみたが

《そこはあれだ、便利な魔法があるじゃん》

《……声帯とか姿かたちとか変えて『大人』として借りたんだね?》  
《こういう時、魔法は便利だ》

言い切るクロウにため息が漏れながら、ユーノは今後についての  
予定を組むことにした。

《もうしばらくすれば、僕の魔力も体力も回復する。それまでにま  
たジュエル・シードが覚醒したら……またあの子の力を借りなきゃ  
いけないけど……》

《……俺の魔力じゃ封印にまで持っていくのはキツイ。とりあえ  
ず探索はするが、覚醒する前のものがあれば先に回収する》

《わかった。覚醒してたら……情けないけどあの子の力をまた借り  
よう。僕たちには今はまだ力はないんだから……》

《わかった。市中を探索する。何かあつたら連絡してくれ》  
《了解したよ》

ユーノ達が少々ジメジメしながら今後の予定を組んでいるころ、学校に登校したなのは友人二人に絡まれていた。

なんでもあのフェレットが入院していた『榎原動物病院』に交通事故か何かで車が衝突、壁に大穴が出来たとのこと。

友人二人はあのフェレットの事が心配だったが『当事者』の一人に入ってしまったのはは、顔を引きつらせ、フェレットの無事を伝えた。

『事故の後逃げ出したフェレットと偶然道で出会って保護した』ということにしたが。

(う、ウソはついてないウソはついてない！ ただちよこつと事実をぼかしただけ……)

このテクニクはクロウから教わったことだ。

彼曰く『ウソをつきたかったら本物の中にウソを混ぜろ。つきたくなければ言いたくない部分を省略して話せばいい。本当の事をウソと思わせたければ、ウソの中に本物を混ぜる。嘘は良いことじゃないが、時と場合によっては必要でもあるから』とのこと。

それを身に染みて感じたなのは、さらに事実をぼかしていく。

「そつ、それでねつ、なんだかあの子、飼いフェレットじゃないみたいで、当分はうちで預かることになったよ」

背中に冷や汗を感じながらもどうにか事実をばかしきれたのか、友人二人もそれ以上追及することはなく、その会話の流れに乗ってユーノの名前も二人に伝えられた。

約一名、紹介されなかった人間がいるが。

(く、クロ君はさすがにねえ……)

小学一年生から三人一緒だったのだ。今いきなり『新しい友達ができた』と言ったら、ウソで作り上げた説明をできるだけの能力は、残念ながらもなには無かった。

国語の授業中、頃合かと思っただのかユーノの『心の声』が届く。

まず簡単にジュエル・シードについて。

簡単に言えば、『ジュエル・シード』とは一種の古代遺産であり、『人の願いをかなえる』魔法の石らしい。

それだけならそれほど危険もないと思われるが、『ジュエル・シード』自体の能力発現が不安定で、簡単に暴走してしまうかなり危険な代物とのこと。

昨夜のものは単体で発現して使用者を求めて暴走したらしいが、偶然動物や人間が拾った場合でも、使用者を取り込んで暴走することがほとんどだという。

そんな超がつくほど危険な代物がなぜこの平和な町『海鳴市』にあるのかと言えば

《……僕の……せいなんだ……》

自責の念からなのかユーノの声が暗い。

ユーノは故郷の世界で遺跡発掘の仕事をしていたらしい。ある遺跡発掘の過程でジュエル・シードを見つけ、調査団に依頼して保管してもらおうよう頼んだが、ジュエル・シードを乗せた時空間船が途中、事故か人為的な災害によって破壊されてしまい、乗せてあったジュエル・シードはそのまま漂流してこの『海鳴市』がある世界までたどり着いた、ということだった。

ジュエル・シードの総数は21。今まで見つけれられたのは、なのはの協力の元で封印した1個を合わせた2個。

まだ19個もの危険な石が、この世界に散らばっている。

《……？ あれ、ちょっと待って》

一つの疑問が、なのはに浮かんだ。

《話を聞く限りでは、ユーノ君のせいじゃないんじゃない？》

そう、ユーノはただ単に『発見して輸送を依頼した』だけなのだ。誰かのせいにするとなれば、確実に輸送できなかった調査団か、『人為的災害』を引き起こした『誰か』であり、常識的に見ればユーノは責められるようなことを何一つとしてやってはいない。それでも。

《だけどっ……あれを見つけたのは、僕だから……全部見つけて、

ちゃんとあるべき場所に返さないと……ダメだから……」

《……何となく……なんとなく、ユーノ君の気持ちがかかるかもしれない。》

真面目なんだね、ユーノ君は《

《……マジメすぎるんだよ》

入り込んできたのは、クロウ。明らかに『呆れた』という声色だ。

《発掘隊は掘り出し物を探し出すのが仕事だ。掘り出したものに対する責任はない。お前が調査団の一員だとか、ジュエル・シードを私用に使うために調査団を襲った奴だって言うならお前に責任があるかもしれないがな。》

今お前がやっているのは、『責任』という名前を借りた自己満足な偽善行為とも取れるぞ《

《……》

《ちょ、ちよっと言い過ぎじゃない、クロウ君!？》

クロウの辛辣な言葉に押し黙ってしまったユーノを擁護するよう  
に、なのははクロウを諷める。

《……兄さんの受け売りなんだけど。》

善か偽善かは、結局はその『善』を受け取った相手が判断するんだ。相手が余計なお世話だと思ってしまうえばそれは『偽善』だ。

逆に相手が『偽善』を感謝して受け取ってくれるなら、それは『善』になるだろう。

最初は『偽善だ』と罵られても、いつかみんなが『ありがとう』と言ってくれる時が来れば、それは『善』を行ったことになるだろうさ《

《そう……なのかな……》

《へえ、いいこと言うね、お兄さんって!》

《……まあ、変な奴だけど自慢の兄貴だからな》

ぶっきらぼうに答えながらもその『兄』をたしかに誇りに思うのか、声には喜色が混じっていた。

《ええと……》

ユーノが意を決したかのように話し始める。

《ゆうべは巻き込んだじゃって……助けてもらって本当に申し訳なかったけど……》

《この後は、ユーノの魔力が回復するまで、少しの間だけ休ませてほしいだけだ。せめて一週間……》

《いや、五日もあれば十分だから!》

《……無理すんな。魔力出し尽くしたんだから、一週間は……》

《なるべく早く戻らないと! だから、それまで……》

《……魔力が戻ったら、どうするの?》

今まで無言で耳を傾けていたなのはが、質問する。

《……また二人で、ジュエル・シードを探しに出るよ》  
《なのはには迷惑かけたし、もともとは俺たち『魔法の世界』での不祥事だからな。『魔法の世界』の人間が尻拭いをするのは当たり前だろ》

二人の答えを聞き、熟考しているかのようなしばらくの間の後、なのはは二人に言った。

《……それはダメ》

《だ、ダメって……》

《私、塾とか学校の時間とかムリだけど、それ以外の時間なら手伝えるから》

《……家事の手伝いとかじゃないんだぞ……危険も多い》

《だって、もう知り合っちゃったし、話も聞いちゃったし、ほっとけないよ》

それにそんな危険なものがそこらじゅうにあるのなら、ご近所にも迷惑かかるから、となのはは続ける。

《助けてくれる人も、いないんでしょ？》

《……一応、当てはあるけど……》

《しばらくかかる。いつになるかわからないしな》

《頼れる人が二人だけじゃ、心細いよ……だから、お手伝いさせて》

ねっ？

そう言われれば、断るわけにもいかず。人の善意を無下にできないのが、この二人だった。

なによりも

《『困ってる人がいて、助けられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけない』って。

これ、うちのお父さんの教えー!》

あの親バカも良い事は教えるらしい。

そしてその愛娘は、その教えを忠実に守ろうとしていた。

すでにすべての授業は終わり、下校時間に。

《ユーノ君もクロ君も困ってて………私は二人を助けられるんだよね?》

魔法の力で》

《………うん………》

《………俺たちにとっては『善』の申し出だ》

二人の答えに安堵したのか、なのはは苦笑いをする。

《私、ちゃんとした魔法使いになれるかどうか、あんまり自信ないんだけど………》

月村すずかの豪邸の前ですずかに別れを告げながらなのはが言う



と、

《なのはは、もう魔法使いだよ。たぶん、僕なんかよりずっと才能がある……》

《そ、そうなの!?!》

《……兄さんよりあるかもな》

《そーなんだ……》

思わぬ評価にびっくりしながらも、迎えの車に乗り込んだアリサと別れを告げ、なのはは別の方向へと走り出した。

《自分ではよく分からないんだけど、とりあえず、いろいろ教えて！私、頑張るから!!!》

《……うん、ありがとう……》

《……俺たち出来るだけの分だな……》

なのはが魔法についての教えを請い、二人が了承してしばらく。もうすぐで少女が家に着くというときに、それは起こった。

「っ……!」

アスファルトが紅くなり、空が黄土色に濁る。

周りの何もかもすべてが停止し

り戻して動き出した。

色を取

《ユーノ君、クロ君、今のって……！！》  
《新しいジュエル・シードが発動している……すぐ近く！》  
《ど、どうすれば！？》  
《……現地集合だ。手伝ってくれ》  
「《うん！》」

そしてなのは駆け出す。あの耳鳴りがする場所へと。

ここは、小高い山の上にある名も無き小さな神社。  
その境内へ続くやけに長い階段を、小動物と小さな二人の人物が  
走っていた。

片方は聖祥大学付属小学校の制服を身にまとった少女、高町なのは。

もう一方は、白いパーカーに黒いボトムをはいた少年、クロウ・  
コーヴァス。

「はあっ……はあっ……く、クロ君、はやいよ……」  
「……お前が遅いだけだ」  
「そ、そんなこと言わない！  
なのは、レイジング・ハートを！」  
「う、うん！」

なのはが宝玉状態のレイジング・ハートを取り出すと、隣でクロウも腰あたりを探って、何かを取り出す。

それは少年の体に合わせて作られたようなサイズの、オートマチックタイプの拳銃だった。

走りながら少年が引き金を引くと少年の体が光り、その青い光が収まる頃には、黒いマントを羽織ったクロウの姿があった。

マントの内側にある彼の『防護服』を表現するなら、白一色。アークセント程度に赤い色が入っている以外はすべて白でまとめられている。

上はシャツのようなものの上に厚手の寸の短い上着を羽織り、下は太ももや腰のあたりにポケットの多いカーゴパンツのようなものをはいていた。靴はスニーカーからごつい運動靴に。腕には指先の部分だけあいたグローブを付けている。

手には昨夜、豆鉄砲程度の威力しか発揮できなかった、アサルトライフルのような『魔法の杖』。

「……上の様子を見てくる」

「あ、ちよつとっ！」

言うのが早いか、なのはを置き去りにクロウは残りの階段を飛び跳ねると、鳥居を潜り抜けて境内へと消える。

「ふう……ふう……」

ようやくなのはが境内に辿り着くと、そこに見えたのは女性を担ぎながら『魔法の杖』を構えるクロウの姿だった。

まかり間違っても小学生に見える少年が、女性とはいえ大の大人を持ち上げられるほどの筋力を持っているとは思えない。

おそらく、先ほど飛び跳ねた時のように、魔法で肉体を強化して

いるのだろう。

「ど、どうなってるの!?!」

「……原住生物を取り込んで……」

その怪物は犬のようにも見えた。四足で立ち、鋭い牙と長い尾を持つ。

目が四つ出来ていることと巨大化したことを除けば、犬の特徴にある程度合致していた。

怪物が前足で攻撃を繰り返すが、人を担いでいるとは思えないほど軽やかなバックステップで、クロウは怪物との距離をあける。

届きそうに届かないゆえか怪物が苛立たしそうに唸ると、ふと怪物がなのは達に気付いた。

「ど、どうなるの……?」

「実体がある分、手強くなってる!」

怪物がなのはたちに向き直り、クロウから視線が外れる。

それを逃さず、クロウは一気に距離を取り、そばの大きな木に女性をもたせ掛けた。

なのははクロウが女性の無事を確保したのを横目で見届けると、一歩前に進み出る。

「だいじょうぶ!

たぶん……」

「……えらい不安になるんだが……?」

「わっ!?! いつの間に……」

「なのはっ!?!」

いつものまにやら、クロウが真横にいた。

なのはが驚いて問いたただそうとするが、それをユーノが遮る。

「レイジング・ハートの起動を！」

なのはの『魔法の杖』がなければ『封印』は難しい。

なので、なのはにレイジング・ハートを起動させようユーノは声をかけるが

「ふえっ？ 『起動』ってなんだっけ！？」

「っ！?!?!?」「っ！」

なのはの一言に、一人と一匹が硬直する。

しかし硬直する間も怪物は迫ってきた。ユーノはなのはの肩にのぼり、

「『我は使命を』から始まる起動パスワードだよ！」

と言うが、それによつやく思い当った節がある少女は

「ふええええ!?!」

あ、あんな長いの、おぼえてないよお〜!?!」

「お前またパスワード長いのにしたのか!? 『即時即応』が出来ないからやめとけっつっただろ!?!」

「日常生活で思わず起動しちゃったらどうするのさ! それに、あの場面は長台詞の方が確実に盛り上がった!?!」

「知るかっ!?! ノリと盛り上がりで長台詞をパスワードにすんじやねえ!?!?!」

メタな話はやめてほしい。收拾がつかないので、主に作者が困る……。

メタ話  
そんなことはさておき、そうこうしている間にも怪物は襲い掛かってきている。悠長に口げんかを楽しんでいる暇など、毛ほども無いのだ。

「今はもう仕方ないでしょ！」

なのは、もう一回言うから、繰り返して！」

「わ、わかったっ！」

「……ちっ！ 『ラピッド・バレット』！」

クロウもこれ以上の論争は無駄とあきらめ、『魔法の杖』を構えて引き金を引く。

いくつもの光弾が高速で怪物に飛んでいくが、昨夜の怪物より防御力が増しているのか、怪物はものともせず突っ込んできた。さすが豆鉄砲。

「誰だ豆鉄砲つつた奴っ！！」

「知らないっ！！」「」

何かに反応して叫ぶクロウだが、真っ向から相手をする事になったこの二人にはどうでもいらしく、軽くあしらわれる。

クロウは側面に移動するが、怪物からも相手にされない。

「くそっ！」

「きゃっ！！！」

起動パswordの詠唱も間に合わずに、なのはが怪物に襲われようとした瞬間。

なのはの手にあったレイジング・ハートが、鼓動を打つ。  
そして、光を放った。

「レイジング……ハート……？」

「Stand by・Ready・

Set up」

ひとりでレイジング・ハートが『起動』を宣言する。

思わず怪物が足を止めるほどの輝きを放った直後、なのはの手に握られていたのは『魔法の杖』になったレイジング・ハートだった。

(ば、パスワード無しで……)

(……『起動』した……?)

ユーノとクロウが愕然とする。彼らの常識の中ではあまりあることでは無いらしい。

足を止めていた怪物が動き出す。いくら『魔法の杖』を得たとしても、なのはの身を守るものはいまだに纏っていない。

「なのは、『防護服』を！」

「ふえっ？ はえっ!?!」

『防護服』と言われて戸惑ったが、昨晚思い浮かべたあの服を思い出し、とっさに思い浮かべる。

「Barrier Jacket」

レイジング・ハートが宣言し、桃色の障壁がなのはを包んだ。

怪物が、なのはに突っ込む。

土埃をあげながら、数メートルは押し出されただろうか。鳥居を潜り抜け、階段を数段降りたような地点で止まった。

激突によるダメージを回避するためになのはから飛び降りていたユーノは、怪物がなのはを押しやった方を見やる。

「なのはっ！！」

「……無事だ」

ユーノのすぐ脇にクロウがやってきて、土煙を見ながら答えた。

土埃がようやく晴れると、『防護服』に着替えたなのはの姿。聖祥大学付属小学校の制服を元にしたのか、胸元の赤いリボンが太いものに変わったり、ところどころに入っていた黒いラインが青く太いものに変わったり、頭に付けていたりリボンが緑のものから白に変わったりなどの少々の変化を除けば、制服姿とはほとんど変わらない。

ただし、靴だけは革靴から運動しやすいタイプの靴に変えられていた。

なのはは一息つくが、鳥居にのぼっていた怪物からの直下攻撃を「Protection」で防ぐ。

実体がある分、前の怪物よりも攻撃力は上がっているはずだが、

「Protect Condition: All Green」

(プロテクションの状態：異常無し)

特に問題も無いらしい。

長い激突の後、おし負けたのは怪物の方だ。そのまま大地に倒れ



伏す。

「……あの衝撃を……ノードダメージで……」

「……『逸材』、だな」

ユーノの隣でクロウがそう評価した。

そんな会話をしている間に、なのはは『封印』の体制に入る。

「レイジング・ハート、お願いね」

「All right .

Seeling mode . Set up」

レイジング・ハートは了解の意を返すと、シーリングモードに変形した。

桃色の帯が、怪物を締め上げる。額には『XVII』のローマ文字が。

「Stand by Ready」

「リリカルマジカル！ ジュエル・シード、シリアル16！

封印っ！……」

「Seeling」

怪物がさらに締め上げられ、霧散する。

後に残ったのは、輝く青い石、ジュエル・シード。それもすぐにレイジング・ハートに取り込まれた。

「Receipt No.16」

「……ふう」

一仕事終え一息つくと、なのはは一人と一匹の方を見る。

「……これで……いいのかな？」

「……うん」

「……これ以上は求めようがない」

一人と一匹に褒められると、なのははうれしそうに微笑んだ。

夕暮れ。

女性が目を覚ますと、目の前に少年がいた。上が白、下が黒という格好で、目つきが悪い。

彼の黒髪は夕焼けの空と相まって、鴉の翼と錯覚した。

「だいじょうぶですか？」

目つきの悪い鴉のような少年は、女性に向けて問いかける。

大丈夫、と言い返せば、少年は一言、そうですか、と言って、

「いきなり倒れてて、びっくりしました。転んで頭を打ったんじゃないんでしょうか。」

たんこぶ出来てますけど、大丈夫ですか？」

言葉は淡々としているが、言葉の端々に女性を心配する声色が混

じっている。

そういえば、後頭部が少し痛いと思ったら、確かにたんこぶが出てた。ジンジンするけど、触った感じだと問題はないっぽい。

そう少年に伝えると、

「氷で冷やすとかした方が良いと思います。それでも痛みが引かなかったら、病院に行った方が良いでしょう」

なんて優しい子なんだ……お姉さん、涙出ちゃうよ……性格悪そうか思っでごめんね……。

そんなことを女性が思っていると、足元に子犬が寄ってきた。

見たところ柴犬のように見えるが雑種かもしれない。思わず抱き上げると、頬を舐めてくる。やばい、超かわいい……。

気に入られましたね、なんて少年が言うもんだからさらに愛着が湧いちゃって、結局飼うことにした。

……独り身の独身女なのだから、愚痴を言う相手くらい居て欲しいものだし。

寂しい思いを子犬とともに胸に抱え、女性は神社から街へと降りて行った。

そんな寂しい背中を見つめる影が三つ。

「おつかれさま……かな？」

「……うん、そうだね」

「クロ君も、あの子が拾われてよかったね」

「…………捨てられていたのかもれないな。その寂しい思いにジュエル・シードが反応して、暴走したのかもしれん」

憶測でなら何とも言えるが、とクロウは付け足す。

『普通の少女』高町なのはが『魔法使い』になって初めての一日が、終わろうとしていた。

新しくできた『魔法の世界の友達』とか、あと18個もある『ジュエル・シード』の事とか、考えるべきこと、分からないことは数多くあれど。

「とりあえず、いろいろがんばるっ!」

「…………うん!」

「…………俺たちも、できる限りの手伝いはさせてもらっからな」

「うんっ! よろしくね、ユーノ君、クロ君!」

夕暮れに舞うカラスの群れ。空が一段と綺麗なせいか、カラスによくあてがわれる『不吉』のイメージは全くなく、むしろ美しくすらある。

「ここにも、塙<sup>ひぐね</sup>へ帰ろうとする鴉が一匹。

「それにしても、お腹すいたね」

「そうだね」

「クロ君も、うちで食べていきなよ!」

「……俺の分なんてないだろ」

「お母さんなら一人前くらい、作ってくれるよ!」

「……俺はあの家に行きたくない……」

昨夜の殺気のコもった視線を思い返してクロウはげんなりするが、別に怯えている様子はない。

それでも面倒くさい事態になりそうなのは直感しているのか、高町家へ行かない方法を模索してはいるものの、満面の笑みの少女に手を取られた瞬間にすべての道は閉ざされた。

「ね、いこっ!」

「……はあ……」

「あはは、ご愁傷様……」

一羽の鴉は、埒わづらへと帰りそびれたようだ。

どうも、イザナギです

だいぶ時間かかっちゃまったぜ……

クロウの姓を『コーヴァス』にかえました。

『コーヴァス』とはカラス属に分類される鳥類の学名です。

カラスカラス連呼してますが、現実じゃカラスは害獣なんですなー

……

……次回もつと楽に書けるはず……たぶん……orz  
それではっ!!

The City Has Many Danger 1

海鳴市にある

「リリカルマジカル！」

とある学校で

「ジュエルシード、シリアル20！」

「  
今日も今日とて

封印！」

「Seelings」

「魔法少女<sup>なのは</sup>」は頑張っています。



不審なものでも見つけたのか遠吠えするどこかの犬っころの鳴き声をBGMに、なのははトボトボと帰路についていた。手に持った杖『レイジング・ハート』の一部をズリズリと引きずりながら。

姿勢は猫背、両腕もだらりと下げ、足取りも少々怪しい。まさに『疲労困憊』という言葉に見合う姿だ。

足元のフェレットのような小動物のユーノが、不安げに声をかける。

「な、なのは、大丈夫？」

「だ……だいじょうぶ……なんだけど……」

ゼイゼイと息をしながら答える様子はとても大丈夫には見えないが、なのはは周りに心配を掛けまいと足を前に出していくが

「ちょっと……疲れちゃった……」

体力の限界に到達したのか、ついに道端に倒れこんでしまう。

この『魔法』というものは使用者の体力にも影響を与えるようだ。途轍もない才能と魔力を持っていても、所詮は8歳の少女。魔力を大量に消費する魔法をここ数日で何度も使えば、あっという間に体力は底をつくのも当然。

そしてさっそく、なのはの体が限界に達した。

「なっ、なのはっ！　なのは大丈夫っ!？」

「……さっそく体力の限界か、無理もない………レイジング・ハート」

「Alliight」

なのはの後ろでノンビリ歩き、しかしいつ倒れるのかハラハラしながら見守っていた少年クロウが、少女のそばに寄ってくる。

クロウが一言レイジング・ハートに声をかけると、レイジング・

ハートは元の宝玉に戻り、なのはの首元へと戻っていった。

それを見届けると、クロウはなのはの腕を取り俗にいう『おんぶ』の格好でなのはを背負う。

「うう……クロウ君いいよ、歩くよ……」

「さっきそこで倒れた人間に言われても、説得力は無い」

「でも……重くない……?」

「……このくらい、どうってことない」

なのはの遠慮をバツサリ切り捨てると、クロウは歩き出した。

「無理しないで、なのは。少し前にも一個封印したんだし、疲れて

るんだから」

「……俺たちは何もできてないんだから、これくらいさせる」

「うう………はあい………」

つまり現在で5つのジュエルシードを封印、回収したことになり、残り16個。クロウとユーノからすれば予想以上のペースであり、嬉しい誤算であったとともに『少女に頼り切っている』という負い目もあった。

しかし現在はユーノの魔力も回復しきれていないうえ、クロウ一人では封印までこぎつけることさえ難しい。

男として悔しいことに二人とも、なのはという少女が今のところの頼みの綱なのだった。

それゆえに、彼女が無理をするのは好ましいことでは無いし、このようになのはが倒れてしまえば彼らに為す術は残されていない。

悔しいが少女に頼り切るしかない今、せめて少女の負担を減らすと、無力ともいえる一人と一匹は努力することにした。

高町家の近く。

「クロウ君……」

「……なんだ？」

「……もういいよ、歩けるから……」

「……そうか」

クロウがゆっくりとなのはを足から降ろすと、まだ少々おぼつかないながらも少女は二本足でしっかり立った。

なのははゆっくり歩きだすと、数歩だけ歩いてクロウを振り返る。

「おつかれさま〜……明日、頑張っ  
てね〜……」

「……ああ……」

苦い顔をしてクロウが生返事を返すと、なのはは今度こそ高町家へと向かった。その足元にはユーノ。さすがに肩に登るのは負担になると判断してのことだ。

その様子を見届けると、クロウは踵を返して自分の堀ねぐへと帰っていった。

翌日早朝。

《クロウ、なのはもだいぶ疲れてるみたいだから今日は休養日にしてよう》

《……了解。俺も個人的に疲れそうだったからな、ありがたい……》  
《あ、あはは……頑張ってね………あ、なのはの準備も終わっ  
たみたい》

《……はあ……どうしてこんなことに……》

念話をしているユーノに、なのはが声をかけた。

「いくよ、ユーノ君」

「あ、うん、なのは」 《じゃ、頑張ってね……》

《……ああ》

高町家からユーノを動物用のかごに入れたのはがでていく。  
行先は、河川敷につくられたサッカーコート。

「似合ってるよ、クロ君！」

「…………そりゃどうも…………」  
《あはは…………》

なのはの賞賛にも不満げなクロウが纏っているのは、『サッカーチームのユニフォーム』。胸にでかかど『MIDORIYA』と入っており、そのロゴの下に14という番号。

周りがボール回しなどでウォームアップをする中、クロウだけは柔軟体操をしていた。

「今日は練習試合だけど、クロウの初陣だね！でも、どうしてお父さんってクロウ君を『翠屋JFC』に入れたんだろ？」

「…………嫌がらせじゃねーの？」

クロウが身に付けているユニフォームは『翠屋JFC』という少年サッカークラブのユニフォーム。

名前からしてわかるとおり『翠屋JFC』とは、なのはの実家である『翠屋』のマスターであり、なのはの父親である高町士郎がオーナー兼監督を務める少年サッカークラブだ。

まあ地方の、しかも個人が設立したチームだけあって、メンバーは一チーム分ほどしかおらず、控えを含めて選手が13人ほど、マネージャーの少女が一人、監督が一人の計15人で頑張っていて、お世辞にも強豪チームと言えるものではないが、クラブのみんなは楽しくやっているらしい。

そしてこの都度、14人目の選手として入ってきたのが、誰あるうクロウなのだ。

そしてなぜこのサッカーコートにいるかと言えば、今日が『翠屋JFC』の練習試合が行われる日であり、選手として強制参加にされたからだ。

まあきつかけは些細なことだ。

神社で封印を行った帰りにクロウは高町家で食事をとることになったのだが。

「……そうだ、クロウ君」

「……なんででしょう……」

珍しいことに土郎の目線から殺気が消え、真剣な様子でクロウに話しかけてきた。

クロウは正直ぞんざいに対処したかったが、そんなことをすればどうなるか分かったもんじゃなかったので、一応丁寧に応える。

くだらない事か？ などと考えていると、

「君は、武道やスポーツをしたことがあるかい？」

「……」

案外まっとうな質問だったことにクロウは言いよどむ。

「……まあ、『武道』のようなものは、してましたけど……」

「そうか……じゃ、スポーツはしたことないのかい？」

「……そういうことになると思います」

ぶつちやけ『武道のようなもの』は『魔法による戦闘』なわけだから詳しく聞かれないように過去形にして、慎重に受け答える。  
すると土郎は、ずいっとクロウに顔を寄せると

「じゃあ、サッカーをしよう!」

「……はあ?」

「あの流れは今でも意味が分からん……」  
「にははは……ごめんね。お父さんって突然いろんなことし始めるから……」

「……まさか、このクラブチームもか?」

「いきなり『クラブチーム作ったぞ! 友達とか誘ってくれ!』って言うてきて……」

「……おいおい……」



ちなみになのはとユーノがここにいるのは、友人である月村すずか、アリサ・バニングスとともにこの試合を応援するため。

柔軟が済んだのか手首をほぐすように回すクロウが、げんなりした目で士郎を見る。

その士郎はフィールドを動き回る少年たちを満足げに眺めると、隣でベンチに座る壮年の男性に話しかけた。

「そろそろ、試合を始めますか！」  
「ですな」

そして二人からそれぞれのチームに集合がかかる。

「……………ん、呼ばれた」

「頑張つてね！」

《応援してるよ》

「……………まあ、出番があれば御の字だろ……………」

なのはとユーノから激励を受け、駆け足で集まりだした少年たちに交じり、クロウは士郎のもとへ。

少女たちはベンチに戻って応援の準備をしようと思ったが

「なあゝのおゝはあゝちゃゝん」

「ふえっ!?!」

そのベンチには、猫なで声でなのはを呼ぶ気持ちの悪い笑みを浮かべたアリサと、困ったような苦笑を浮かべたすずかがいた。

なのははといえば、親友の見たことない表情にいやな予感を覚え、冷や汗を垂らしている。

「ど、どーしたの、アリサちゃん……?」

「さあ〜つき話してた男の子は〜、だあ〜れかなあ〜?」

「ふ、ふええっ!?!」

試合が始まった。

と同時になのはたちの声援が始まる。

《これって、こっちの世界のスポーツなんだよね?》

《そーだよ。サッカーっていうんだ》

ただしなのははユーノに説明することに集中していて、ほとんど声は出してないが。

そんなこんなしているうちに、10番の選手からのダイレクトパスで、『翠屋JFC』が先制した。なかなか良い滑り出しと言える。その後も勢いに乗る『翠屋JFC』の選手たちだが、相手もけっこう必死に守りだし、膠着状態しょうせきじょうたいのまま前半が過ぎていった。

その間に軽くルールについて説明していたが、なのははユーノに聞いてみる。

《ユーノ君たちの世界にも、こういうスポーツってあるの?》

《あるよ。僕は研究と発掘ばかりで、あんまやってなかったけど

……》

《にやはは、私といっしょだ。私もスポーツはちょっと苦手……。

クロ君は……やってないって言ってたね》

《……兄貴と一緒に旅をしていた。遊びなんて数えるほどしか知らないし、スポーツも、知ってるものはあるけど、やったことはない》

《そ、そーなんだ……》

《……まあ、旅をしていたおかげで多少は運動神経は良いと思ってる。この『サッカー』に通用するかどうかは疑問だけど……》

ちなみにクロウは現在、ボールを持ってリフティング中だ。足のみならず、頭、肩、ひざを使ってリズムカルにボールを蹴り上げる。ぶつちやけ運動神経がどうのという話じゃない。

《このクラブに入れられて覚えたものと言えば、この『りふていんぐ』ってやつくらいか。三日くらいかかったが。

……これ見せたら、みんながひざをついてたんだが》

そりやそうだ。クロウがやっているような高度なリフティングを身に付けている選手は『翠屋JFC』では一人しかおらず、彼も何ヶ月もかけてその技を身に付けた。その選手の背番号は10。<sup>キース</sup>

それを『サッカーも知らないようなよそ者』に三日ほどで習得されたとなれば、驚くとか感嘆するとか以前に落ち込んでも無理はない。

《にやはは……》

自覚がないようなクロウの様子に、なのはは笑うしかなかった。

数日でこれだけ出来る事を示せば、初心者の小さい子供たちがスポーツを始めるために入るようなジュニアクラブでは即スターティングメンバ、スタメンで出られるようなものだ。

しかしクロウはベンチスタート。

別に深い理由はない。土郎がクロウを気に食わないから出さない、というわけでもない。土郎という男はスポーツや武道などの実力の世界では、きちんと相手のことを認める人物なのだから。娘に弱い親バカというだけの話だ。

クロウがスタメンではない理由とは、ただ単にルールを把握していないから、というだけ。

実際、リフティングに飽きたクロウは、メンバーが手製で作ってくれた、一枚程度にまとめられた、簡単なルール表を眺めてルールを覚えこんでいる。

前半が終わり、後半に入るまでのハーフタイム。  
土郎がクロウの方を見た。

「クロウ君、行けるか？」

「……一応、この表のは全部、覚えましたが」

そういつてひらひらと、手に持つ表をゆらす。

前半のあいだでリフティングを行っていたのは前半も終わりのころ。それまでは表を片手に試合を観察し、表と照らし合わせてルーを的確に覚えこんでいたのだ。

「よし、じゃあ後半の頭から行くぞ」

士郎はそう言ってスタメンの一人に下がるように伝える。

「それじゃあ、クロウ君も入ったことだし、作戦を変えよう！」

そういつて士郎は、手に持てるほどの小さいホワイトボードとマジック・ペンを取り出した。

ボードにはすでにサッカーコートのようにラインが引かれ、消えないように加工してある。

そしてボードには、何が書かれているのか分からないほどグチャグチャにマジックで何か書き込まれていた。矢印のようなものが見えるので、おそらく作戦や選手の動きを表したもののだろう。

士郎は書き込みを消すと、新たに丸を書きこんでいく。フィールドの特定の箇所に丸を10個、ゴール前に一つ書き込むと、士郎は選手たちの前にボードを差し出した。

選手たちはそれを覗き込むようにして見つめる。

「フォーメーションは2-4-4、トップ下にクロウ君を入れる。サイドのミッドフィールダーのふたりはクロウ君にボールを集めること。クロウ君がマークされたら、自分たちで前線を押し上げること」

次々と番号がホワイトボードに書き込まれ、クロウは『トップ下』、別名『攻撃的ミッドフィールダー』と呼ばれるポジションを任せられた。

フォワード、つまり最前線の二人組の真後ろのポジションで、前線の二人にボールを回したり、自分でゴールを狙いに行く役割を持つ。

ちなみにこのチームの10番が任されていたポジションでもある。その10番はクロウのさらに真後ろ、『ボランチ』『守備的ミッドフィールダー』などと呼ばれたポジションに下がっていた。

まあ実際のところ

「クロウ君は積極的にゴールを狙うこと。もしフォワードの二人がフリーになっていたら、二人にもパスを出すんだ。

守りの事はあまり考えなくていいけど、相手からボールが捕れそうだったら仕掛けること」

フォワードが3人になったようなものなのだが。

それでもクロウのようなトップ下がフォワードより少し後ろにすることで攻撃の橋頭堡（かきづつぽう）（攻撃の基点）となり、ボールを前線へ送りやすくなる。

だから士郎はクロウをトップ下にしたのだろう。

そのあとも士郎がそれぞれのポジションの選手に指示を出し終え

ると、ハーフタイムが終わった。

《クロウ、頑張って!》

「頑張れクロくん!」

二人の、というかユーノのものは念話なので実際聞こえたのはなのはの一人分だったのだが、その声援にクロウは片手をあげるという方法で答える。

「ふーん……『クロ君』なんて呼んでるんだあ……ずうーいぶん親しい間柄なのねえー……」  
「ふえっ!」

なのははクロウの事で、またもやアリサに絡まれたが……

《く、クロ君誤解を……》

《人前で不用意に発言するお前が悪い。》

……試合が始まる、あとはどうにかしてくれ  
《ふええー!》

ユーノも喋れないし、孤立無援となっただらしい。

試合結果は2 - 0で『翠屋JFC』の勝利に終わった。

クロウのプレーは監督である土郎の想像した通りのもので、ドリブルでの突破、パスやシュートの精度など、どれをとってもこのチームでエースと呼ばれて相応しいものだった。

後半の一点を決めたのもクロウだ。

後半開始直後からクロウはボールを奪いに走り、それを相手がついてパス、味方がそれをカット、といった具合に序盤からボールを支配。

土郎の指示通りにクロウにボールを集めれば、クロウが突破を図り、その突破力に危機感を持った相手チームのマークが厳しくなる。それに乗じてマークが弱くなった味方が広く展開して、有利にゲームを運んでいた。

その対処をするうちに薄くなったマークの隙を突き、ボランチの位置にいた10番からキラーパスとも呼べるパスを受けたクロウがディフェンス陣を突破して、鋭いシュートで相手のネットを揺らしたのだ。

年齢に比べるとハイスペックな能力を持つクロウだが、欠点難点を挙げるとすれば、ポジション取りか。

マークが厳しくなった影響でパスカットされるのが多くなると少しずつボールを取る位置が下がっていき、前線に運ぶ手間によって攻撃のテンポが悪くなるといった事態に。

それはいずれ改善しよう、と土郎は胸の内に決意し、新しく入っ



たダイヤの原石を微笑ましく見ていた。

(それとこれとは別の話だけどな！)  
なのは

親バカは親バカだったが。

『喫茶翠屋』にて。

今日は買ったお祝いに、飯でも食うか！

土郎の宣言で、JFCの昼食を翠屋でとることになり、店内はJFCの貸切状態。

しかも今日の勝利で気前がよくなったのか、代金はマスターである土郎持ちらしい。

JFCのみんなが店内で仲良く談笑する中、試合で1得点上げ急に存在感を増した最新参の14番、クロウは、というと。

「ふ〜ん、『道で偶然、落とし物を拾ってもらった』時に知り合っただあ〜。で、『フェレットを助けたときに偶然再会』してお友達になったのねえ〜……。」

「……ホントにい？」

「ほ、ホントだよ〜……。」

「……嘘をつくメリットがない」

アリサに関係を根掘り葉掘り聞きだされる羽目に、  
簡単な話だ。

なのは試合でクロウがボールを持つと、必ず応援の声を上げていた。しかしJFCの選手たちとはあまり交流は無く、思い入れるほど親しい人物は、実はいなかったりする。

では何故、なのははクロウばかり応援するのか。

なのはは友達になったからだと思死に言い逃れていたが、友人になって三年間、相手の事なら何でも知っていると切り切れる中になった三人のうちの一人に、『見知らぬ友達』が増えていた。

自分たちが知らないうちにつくった友達を、自分たちにさえ紹介しなかった少女、なのは。

(なにか特別なことがある、ゼツタイ！)

アリサはそう考えていたが、

(あやしいわね……このクロウって男の子しか応援しなかったし、もしかしたら……彼氏だったりするの？)

さすがに『魔法の世界から来て、魔法をなのはに教えている』とは思わなかったらしい。まあそれが正常な思考であるが。

しかし的外れゆえに、なのは達は誤魔化すしかなく、それがより一層アリサの追及が厳しくなる原因となっていた。

ちなみにこの年齢で『恋人』という存在を持つのは珍しいことでは無いようで、JFCのゴールキーパーはマネージャーと付き合っ

ているらしい。リア充爆発しろ。てかその歳で恋人ありとかマセすぎねえか？

清い交際だろうから良いんだが……。

まあなのは終始ワタワタしていたがなるべく口を閉ざし、クロウの方はポーカーフェイスで何もさとらせようとはしなかった。

実は念話で必死に（主になのはが）会話をして辻褄を合わせていたのだが。

「ふーん……まあいいわ。今日はこれくらいで勘弁してあげる」

「……そりゃありがたい（……会うたびに詰め寄られるな、これは）

「ほ、ホントにお友達なんだってば（ううう……アリサちゃんの誤解が解けないよう）」

ようやくアリサの追及が終わったようだ。

そして話題は二人の念話での掛け合いに巻き込まれていたユーノに視線が行く。

「……………それにしても、改めて見るとなんかこの子ちょっとフェレツトとは違うかい？」

ビクウツ！

そんな擬音がつきそうなくらいになのはとユーノが硬直する。クロウは外見はどうもなかったが唯一、右の眉が一瞬吊り上った。

「そついえばそうね」

すずかも賛同し、なのはとユーノは冷や汗を垂れ流しだす。

《く、クロ君!》

《……『少し特殊なフェレット』ってことで押し通せ》

クロウも『保護する場面に居合わせた』というだけの設定なので援護は出来ない。よって念話によって、なのはを誘導することに。

「ちょ、ちょっと変わったフェレット、ってことで……ほ、ほらっ、ユーノ君、お手!」

「キュッ」

混乱して保護した夜のことか思い出されたのか、なのははユーノにお手を要求し、ユーノもお手に応えた。

「わぁ……」

「か、かわいい……」

女性陣が感心する中、二度目を目撃したクロウは

「……犬かよ……」

ぼそっとツツコンでいた。

その間にも、なのはの友人二人は止まらず

「賢いね」

「賢い賢い」

二人して頭を撫でてみくちやにし始める。その様を見て、なのはは念話で謝罪した。

《ごめんね、ユーノ君……》

《だ、だいじょうぶ……》

《……役得だ。堪能しとけ》

《あんまり……嬉しくない……》

楽だったけど短くなるわけじゃないんだな……

クロ君、JFCに入っちゃいました。

てかJFCならまだ小学校でしょ？

小学校のころにもう彼女出来るとかどんだけカッコいいんだよ……  
うらやましい

そんなオレはカッコつけてただけでしたけど。

小学校のころは黒歴史ですよ。女子に嫌われて女性不振？女性恐怖症？になりましたから。いじめもありましたし。やりましたしやられました。

そう考えると、小学校って大変な場所だったんだな！。

いじめは因果応報だし、女子の方は記憶にありませんが、俺が何かしたのかもしれないねー、引かれる何かを。まったく記憶にない……何が原因だったのか本当に確かめたい……。

あの頃に分かりました。『俺には自殺する度胸も無い』って。

自殺ってたぶん苦しいし痛いじゃないですか。

痛いのも苦しいのも嫌いだから、俺、自殺しなかったんでしょうね。

はあ……俺の小学校の思い出の真っ先がこれってどーよ。

楽しい思い出もあったと思うんだけどなあ……。

暗い話してんじゃねーよちくせう

次で終わらせたいな……知らん奴らのデート話は省く方向で。

さあ、（たぶん）本格的に始動しますよ、『魔法少女リリカルなのは』が！

次回お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0190y/>

---

魔法少女リリカルなのは ある鴉の兄弟の話

2011年11月24日02時54分発行